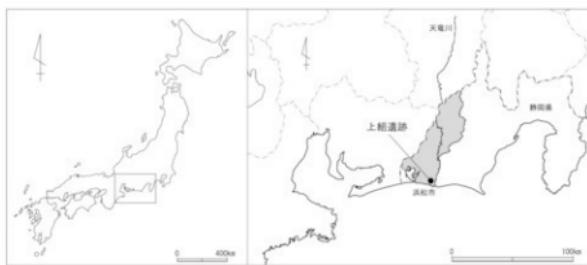


上組遺跡

2011

(財) 浜松市文化振興財団

上組遺跡



2011

(財) 浜松市文化振興財団



南調査区全景(東から)

卷頭図版 2



陶馬



かわらけ集合



貿易陶磁器



例　言

- 1 本書は浜松市南区渡瀬町における上組遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、宅地造成工事に先立つ発掘調査として、株式会社ヤマセ不動産の委託を受け、浜松市教育委員会(浜松市生活文化部文化財課が補助執行)の指導のもと、財團法人浜松市文化振興財団が実施した。調査にかかる費用は全額委託者が負担した。
- 3 発掘調査にかかる期間は以下の通りである。
試掘調査 平成 22 年 4 月 13 日
委託期間 平成 22 年 7 月 1 日から平成 23 年 3 月 25 日
- 4 発掘調査は鈴木一有・影山重広・関根章義(浜松市文化財課)が担当し、吉田悠歩(浜松市文化振興財団)が補佐した。
- 5 本書の執筆・編集および写真撮影は関根章義が担当した。
- 6 調査にかかる諸記録および出土遺物は浜松市生活文化部文化財課が保管している。
- 7 本書で用いる座標値は世界測地系に準拠しており、図中の方位表示は座標北である。レベル高は標高である。
- 8 土層・土器の色調は『標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議局監修)に準拠した。
- 9 遺構の略記号は次のとおりである。 SP：小穴 SK：土坑 SD：溝 SE：井戸

目　次

巻頭図版

例言	第Ⅲ章 発掘調査の成果 ······	7
第Ⅰ章 調査の概要 ······ 1	第1節 試掘調査 ······	7
第1節 調査に至る経緯 ······ 1	第2節 基本層序 ······	7
第2節 調査の方法 ······ 1	第3節 南調査区 ······	11
第3節 調査の経過 ······ 1	第4節 北調査区 ······	22
第Ⅱ章 地理的・歴史的環境 ······ 2	第Ⅳ章 まとめ ······	33
第1節 地理的環境 ······ 2	写真図版	
第2節 歴史的環境 ······ 3	報告書抄録	

挿　表　目　次

表1 出土遺物観察表(1) ······ 34	表5 出土遺物観察表(5) ······ 38
表2 出土遺物観察表(2) ······ 35	表6 調査区分別中世遺物組成表 ······ 38
表3 出土遺物観察表(3) ······ 36	表7 遺構別中世遺物組成表 ······ 38
表4 出土遺物観察表(4) ······ 37	

挿図目次

- 第1図 上組遺跡周辺の遺跡分布図
第2図 調査区周辺地形図
第3図 調査区周辺地籍図
第4図 調査区全体図
第5図 土層断面図(1)
第6図 土層断面図(2)
第7図 SD01 実測図
第8図 SD03・04・08～11 実測図
第9図 南調査区溝出土遺物
第10図 SD14・15 実測図
第11図 SD14～16 出土遺物
第12図 SD14. 包含層出土土製品
第13図 南調査区土坑実測図
第14図 南調査区井戸・小穴実測図
第15図 南調査区土坑・井戸・小穴出土遺物
第16図 南調査区包含層出土遺物(1)
第17図 南調査区包含層出土遺物(2)
第18図 北調査区上層遺構群全体図
第19図 北調査区上層遺構群出土状態図
第20図 SK201・202・203・205 出土遺物
第21図 SP201～211 出土遺物
第22図 北調査区溝実測図
第23図 北調査区土坑・井戸・小穴実測図
第24図 SE201・202, SD201 出土遺物
第25図 北調査区包含層、試掘調査、排土出土遺物

卷頭図版目次

卷頭図版1 南調査区全景(東から)

卷頭図版2 陶馬

卷頭図版2 かわらけ集合

貿易陶磁器

写真図版目次

- 図版1 南調査区全景(西から)
図版2 SD01 完掘状況(南東から)
SD14 完掘状況(北東から)
図版3 SD04 出土状態(北から)
SD04 完掘状況(北から)
SD11 出土状態(南西から)
図版4 SK03 出土状態(南から)
SE02 完掘状況(南から)
陶馬出土状態(西から)
図版5 北調査区全景(西から)
北調査区上層遺構出土状態(南東から)
図版6 SK201 出土状態(南から)
SK202 出土状態(南東から)
SP205～208 出土状態(東から)
SE201 下層出土状態(北西から)
図版6 SE201 上層出土状態および土層
(西から)
図版7 SD01 出土遺物集合
図版8 SD04 出土遺物集合
SD04・11 出土遺物
図版9 SD14 出土遺物
図版10 SD14, SK01・03, SE03,
包含層出土遺物, 土製品集合
図版11 南調査区包含層出土遺物
図版12 SK201・202 出土遺物
図版13 北調査区上層遺構群出土遺物,
SP207・208・209 出土遺物
図版14 SE201 出土遺物
図版15 SE201, 北調査区包含層出土遺物

第Ⅰ章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

上組遺跡は浜松市南区渡瀬町に所在する遺跡である。遺跡は飯田街道に隣接し、周囲には住宅街が広がっている。今回の調査地点は、平成22年に株式会社ヤマセ不動産(以下、ヤマセ不動産)により宅地造成工事が計画されたため、試掘調査を同年4月13日に実施した。その結果、上組遺跡は從来よりも南側に広がることが判明し、開発予定地内にも遺跡がおよぶことが確認されたため、ヤマセ不動産と協議を行い、市道移管部分および用水路擁壁の設置箇所に関して、本発掘調査を実施することになった。

第2節 調査の方法

今回の調査区は、ヤマセ不動産による宅地造成工事範囲内の、用水路擁壁設置部分を対象地とした北調査区と市道移管部分を対象地とした南調査区に分かれている。両調査区の面積は併せて460m²になる。

調査を開始するに当たり、両調査区の端に任意の基準点を設置し、その基準点の座標値は業者に委託して、世界測地系座標と標高値を求めた。遺構等の測量はそれら4箇所の基準点を基に行った。調査区内の表土および耕作土はパックフォーのバケットに平爪を装着し、包含層まで掘削した。包含層については、北調査区の遺物が集中的に出土した箇所を除き、パックフォーで遺構検出面の上面まで慎重に掘削し、掘削後に遺構検出を行った。また、北調査区の一部では包含層の上面で遺構検出が可能であったため、包含層上面で遺構検出を行い、遺構掘削後に包含層を人力により遺構検出面まで掘削した。遺構検出後は適宜掘削を行い、遺構内出土の遺物は状況に応じて出土状態図を作成し取り上げた。遺構の平面図は、調査区内に設置した基準点を基に、トータルステーションを用いて作成した。土層断面図や出土状態図は任意の基準点を設定して作成し、併せてその基準点の世界測地系座標を求め、平面図に合成できるようにした。

今回の調査では、写真撮影は主に6×7判カメラを用い、モノクロとカラーリバーサルのフィルムを使用した。併せてデジタル一眼レフカメラでの撮影も行なった。また、完掘後の全体写真には4×5判カメラも用いて撮影した。高所からの撮影にはローリングタワーを使用した。

調査で出土した遺物の洗浄や注記などの整理作業については、現地調査の段階から併行して行い、本格的な整理作業は現地調査が終了してから、浜松市東区宮竹町の宮竹野際遺跡調査事務所および浜松市西区神原町の浜松市埋蔵文化財調査事務所で行った。出土遺物については接合・復元・実測・写真撮影、図面等の記録類は編集・トレースを行い、それらを基に原稿を執筆し、発掘調査報告書を作成した。なお、調査の諸記録および出土遺物については、浜松市埋蔵文化財調査事務所にて保管をしている。

第3節 調査の経過

試掘調査

試掘調査は、平成22年4月13日に行い、開発予定地内に1×2mの試掘坑を6箇所設定して実施した。試掘坑の掘削は、パックフォーで層位的に行い、掘削後は遺構・遺物の有無や土層の堆積状況を確認し、調査終了後は掘削土を流用して埋め戻し、旧状に戻した。

現地調査

現地調査は、7月23日までに調査機材の準備と現地事務所への搬入を済ませ、7月26日から開始した。7月26日(月) 南調査区の一次掘削を開始し、西端付近で遺構検出面の黄褐色シルト質土層を確認した。8月 2日(月) 北調査区の一次掘削を開始し、およそ3分の2まで掘削した。しかし、一部は包含層の上面で遺物が密集して出土したため、遺構検出面まで掘削は行わなかった。

8月 3日(火) 北調査区の遺物集中地点を精査し、土坑や小穴が多数切り合う状態で検出された。また、

調査区内の土層を観察した結果、調査区の中心に包含層が鳥畠状に残されていることが判明した。

8月 5日(木) 北調査区で検出したSP201～209, SK201・202を掘削し、SK201・202からはかわらけがまとまって出土した。また、SK202, SP204から白磁、SP207から天目茶碗が出土した。

8月 9日(月) 本日から16日までの間は雨のため作業はできなかった。

8月 17日(火) SK201・202, SP203～209の出土状態を撮影し、撮影後に出土状態図の作成に入った。

8月 18日(水) SK201・202, SP203～209の出土状態図を作成し、遺物を取り上げた。

8月 19日(木) 南調査区東側の遺構検出中にSD14上面から陶馬が出土した。

8月 23日(月) 北調査区の上層遺構を完掘し、完掘状況の写真撮影を行った。撮影後に平面図を作成した。

8月 24日(火) 北調査区で残していた包含層を遺構検出面まで人力で掘削し、併行して遺構検出を行った。

8月 31日(火) 北調査区の清掃を行い、全体写真を撮影した。撮影後、完掘状況の平面図を作成し、北調査区の調査を終了した。

9月 9日(木) 南調査区の遺構掘削を終了し、併行して完掘状況の平面図を作成した。

9月 10日(金) 南調査区の清掃を行い、全体写真を撮影した。撮影後に現地説明会の準備を行った。

9月 12日(日) 現地説明会を行い、326名の参加が得られた。

9月 16日(木) 南調査区の土層断面図を作成し、21日に土層注記を行い、調査を終了した。

9月 22日(水) 調査機材の一部と出土品を宮竹野際遺跡調査事務所に搬入し、現地から撤収した。残りの調査機材は高塚遺跡調査事務所に搬入した。また、プレハブの撤去は24日に行った。

整理作業

整理作業は現地調査中から現地事務所で行った。出土遺物は、現地調査期間中に洗浄までを行い、調査終了後の9月下旬から本格的に整理作業を開始した。出土遺物の注記作業は10月中旬までにすべて終了し、北調査区の遺物から接合作業を始めた。接合作業は11月下旬まで行い、接合作業が終了した遺物から実測作業に取り掛かった。遺物の実測は1月下旬までに終了した。

また、調査終了後これらの作業と併行して、現地で作成した図面の整理作業を行った。製図作業は遺構図版から始め、9月下旬から12月上旬まで行った。終了後には、遺物図版の製図作業を12月中旬から1月下旬まで行った。さらに、11月中旬から2月上旬まで図化した遺物の復元作業を行い、遺物の写真撮影に備えた。その後、2月中旬に遺物の写真撮影を行った。そして、報告書の原稿執筆を調査終了後から始め、1月上旬からは図版類と併せて編集し、3月下旬に本報告書を刊行した。

第Ⅱ章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

今回調査した上組遺跡は、浜松市南区渡瀬町に所在し、三方原台地と磐田原台地に挟まれた天竜川西岸の沖積平野に立地している。この平野は天竜川の氾濫で運ばれた土砂により作られた扇状地であり、この平野内は流路跡や後背湿地による低地と流路間の中州であった微高地で構成されている。現在の天竜川は治水工事が進んだことにより流路が固定されているが、絵図や古地図からは流路が複雑に入り組んでいたことがわかる。そのため、天竜川沖積平野の旧地形は、自然堤防と流路で入り組み、天竜川の度重なる氾濫により流路や地形が現在までに幾度も変化していたことがうかがえる。

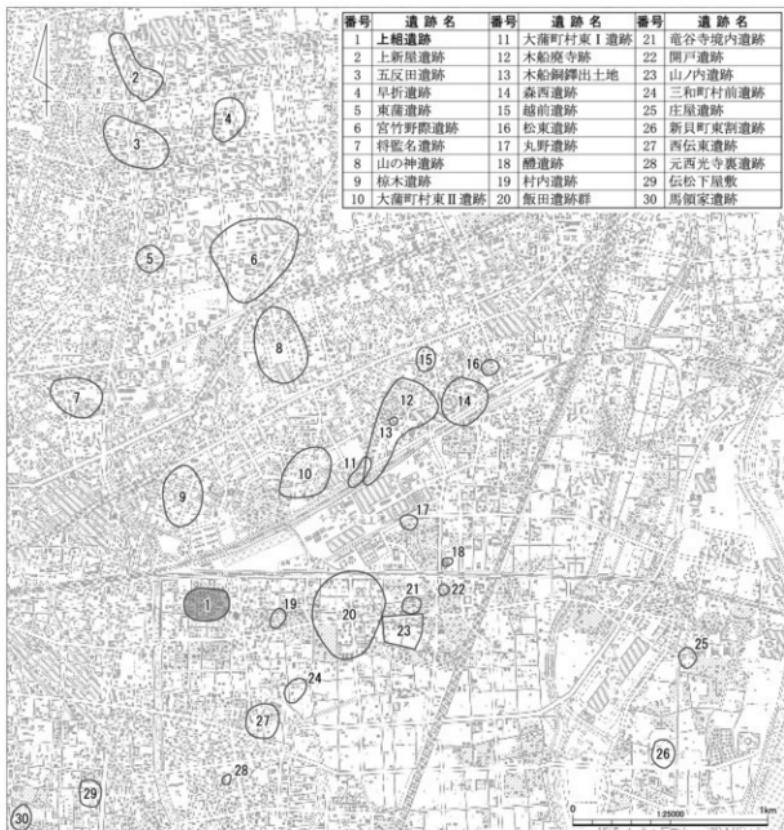
上組遺跡は天竜川により作られた沖積平野の微高地上に立地しており、現在は、西に芳川、東に安間川が流れているが、従来はこれらの河川も天竜川の流路の一部であったことが想定される。江戸時代の絵図によると、芳川は遺跡の周辺で「コ」字状に大きく蛇行しており、遺跡は周囲を芳川に挟まれた微高地上に營まれていたことが想定される。

第2節 歴史的環境(第1図・第3図)

天竜川西岸の沖積平野で人が生活し始めるのは、縄文時代晚期頃であり、宮竹野際遺跡(6)で突帯紋系土器が出土しているが、明確な遺構はまだ確認されていない。さらに、宮竹野際遺跡(6)や山の神遺跡(8)、森西遺跡(14)、松東遺跡(16)で弥生時代前期の遺物が出土しているが、本格的に集落が営まれるのは弥生時代後期以降である。弥生時代後期になると遺跡数が増加し、将監名遺跡(7)や山の神遺跡(8)、松東遺跡(16)などの環濠を伴うような拠点的な集落が形成されるようになる。

古墳時代の天竜川西岸地域では、全長56.3mの前方後円墳である赤門上古墳が築造され、当地域の首長墓と推測される。また、三方原台地の縁辺部には多くの群集墳が造営され、当地域の有力者の墓が連続と繋かれる。一方で、沖積平野では集落跡が希薄となり、笠井地区の恒武遺跡群で古墳時代の集落が形成されるほかは、大蒲町村東II遺跡(10)で堅穴住居が確認されているだけで、集落の様相は不明である。

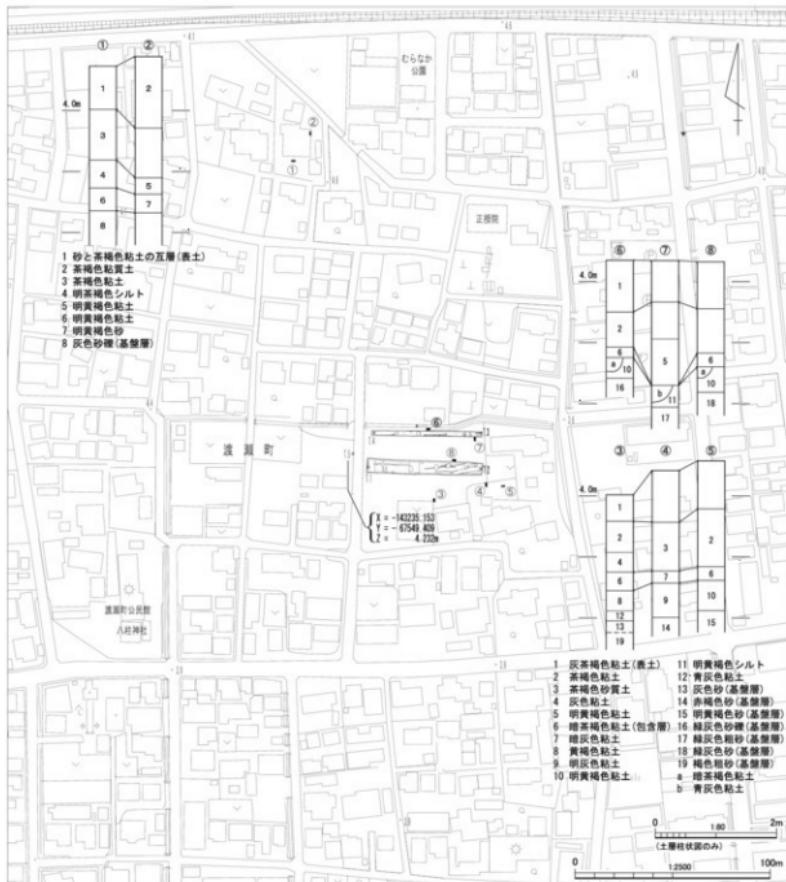
奈良・平安時代になると全国的に行政組織が整い、各地域は国・郡・里に分けられる。浜松市域は敷



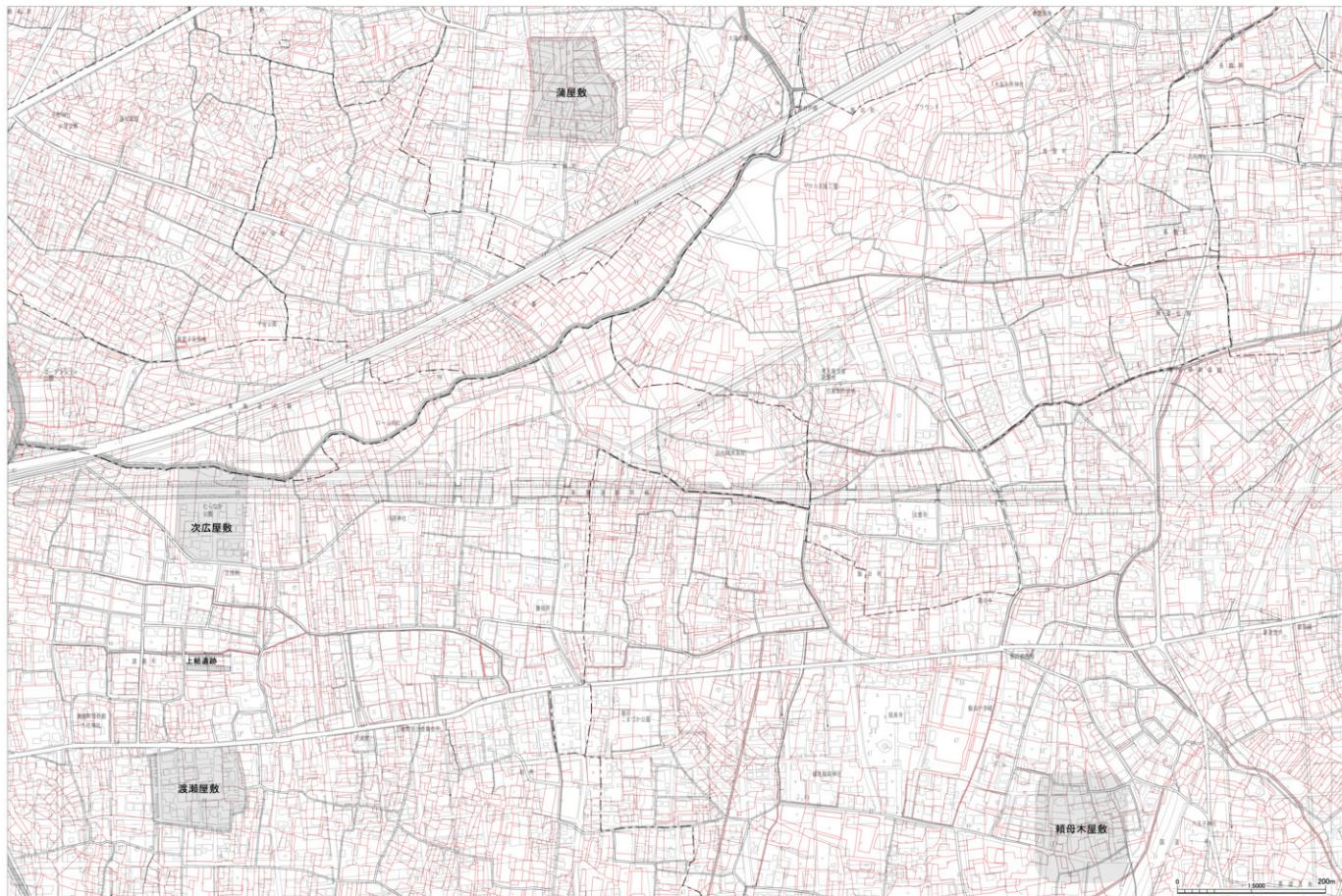
第1図 上組遺跡周辺の遺跡分布図

智・長田(709年に長上と長下に分割)・龜玉・引佐・浜名の5郡に分かれ、上組遺跡周辺は長田(長下)郡に属すると考えられる。長田郡内では、明確な遺構は検出されていないが、大蒲町村東I遺跡(11)で木簡が出土し、その内容から長田郡衙と想定される。さらに、木船廃寺跡(12)では古代の瓦が出土しており、郡衙に付属する寺院と見られる。また、宮竹野際遺跡(6)では、硯や瓦、墨書き器などが出土しているため、郡衙に関連する遺跡と捉えられ、長田郡では郡衙の関連施設が近接していたことがうかがえる。

平安時代後半頃から中世にかけて、天竜川西岸地域では荘園開発が進み、池田荘や浜松荘、川勾荘、伊勢神宮領の蒲御厨や美濃御厨などが成立し、上組遺跡周辺は蒲御厨に含まれる。蒲御厨は伊勢神宮の荘園として成立するが、史料から13世紀には蒲氏が、14世紀以降には公文層が御厨内での在地支配を担っていたと見られる。これらの有力者層は御厨内に広い屋敷地を構えていたようであり、地籍図や伝承から、上組遺跡周辺には、渡瀬屋敷や次庄屋敷、頼母木屋敷、蒲屋敷などの屋敷地の存在がうかがえる。



第2図 調査区周辺地形図



第3図 調査区周辺地籍図

える。また、明徳2年(1391年)に蒲御厨は、足利義満により東大寺に寄進され、大部分が東大寺領の莊園となる。さらに戦国期には、今川氏の支配下に組み込まれ、それら領主の経済基盤となっていく。そのような中で、上組遺跡周辺では中世集落の様相は不明な点が多いが、いくつかの遺跡ではその一端をうかがうことができ、宮竹野際遺跡⑥や山上遺跡⑧では掘立柱建物跡や井戸跡が検出されている。また、上新屋遺跡②や大蒲町村東Ⅰ遺跡⑪、大蒲町村東Ⅱ遺跡⑩、飯田遺跡群⑯中の寺西遺跡でも多くの遺構や遺物が検出されており、蒲御厨内で広く生活の痕跡が確認できる。さらに、伝松下屋敷⑲では、苑池や礎石建物跡、溝跡などが検出され、15世紀～16世紀の居館跡であったことが明らかとなっている。

第Ⅲ章 発掘調査の成果

第1節 試掘調査(第2図)

試掘調査は、遺跡範囲内で住宅の新築工事およびその隣接地で宅地造成工事が計画されたため、平成22年4月13日にそれぞれの開発予定地内で行った。開発予定地内には1×2mの試掘坑を合計8箇所に設定し、設定した試掘坑には、本報告書作成の段階で、便宜上①～⑧の番号を付した。

新築工事予定地内では、①と②の試掘坑を設定して調査を行った。調査の結果、それぞれの試掘坑で同じ堆積状況が見られ、遺物は少量出土したが遺構は検出されなかった。各試掘坑の土層は、表土(1・2層)の下に茶褐色粘土(3層)が厚く堆積し、その下層に、明茶褐色シルト(4層)と明黄褐色粘土(5層)、明黄褐色粘土(6層)と明黄褐色砂(7層)が堆積する。さらに下層では、灰色砂礫(8層)の基盤層が確認できる。出土した遺物には、7～8世紀頃の須恵器や土師器の破片があり、1～3層で出土したが、いずれも小破片で磨滅も顕著である。以上のことから、開発予定地内は遺跡の範囲外であると判断できるが、わずかながら遺物が出土しているため、遺跡の中心からは大きく離れていない地点と想定される。

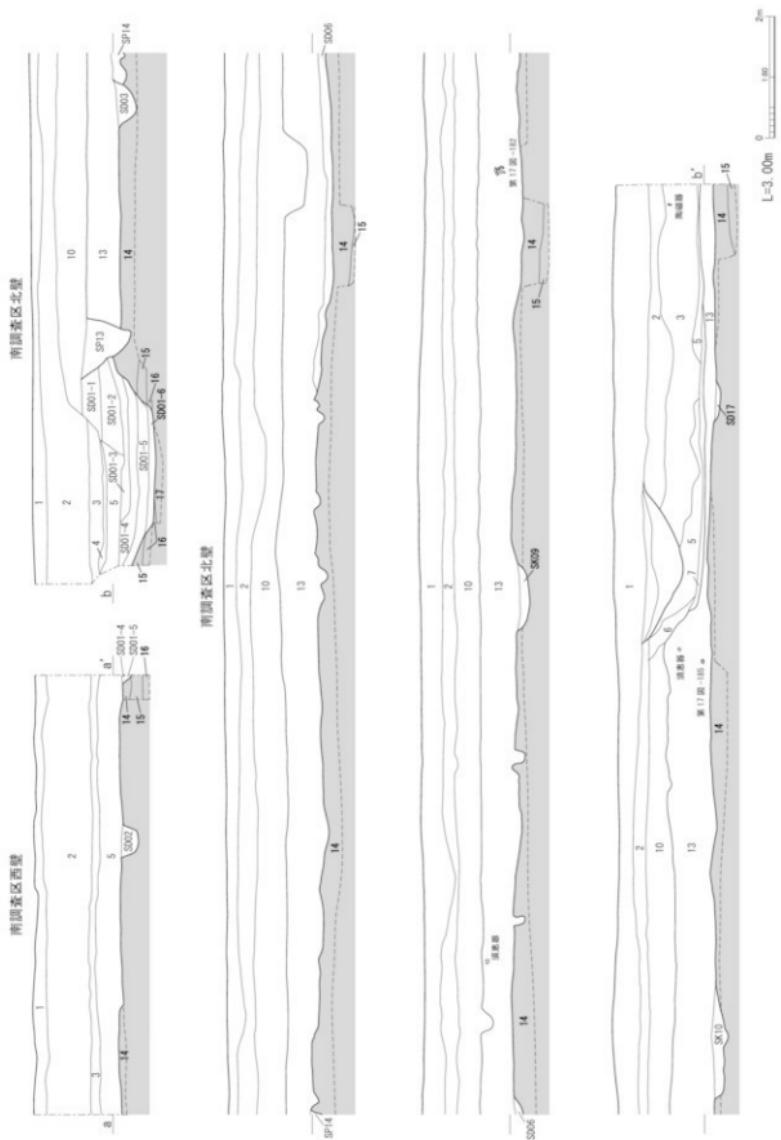
宅地造成工事予定地内では、③～⑧の試掘坑を設定して調査を行った。調査の結果、試掘坑⑥・⑧で包含層(6層)が確認でき、遺物や遺構も多く検出された。各試掘坑の土層は、表土(1層)の下に茶褐色粘土(2層)が厚く堆積し、その下層に包含層と捉えられる暗茶褐色粘土(6層)が確認された。この層は20cm前後の厚さで堆積し、北や東に向かって標高が高くなる。包含層の下には、同一層と見られる8～12層が堆積し、いずれも遺物は含まない。それらの下層には基盤層である砂層(13～15・17～19層)や砂礫層(16層)が確認できる。また、基盤層も標高は北や東に向かって高くなる。遺構は試掘坑⑥・⑦・⑧で検出し、いずれも10・11層を掘り込んでいる。遺物は、試掘坑⑤で1・2層から山茶碗や土師器の小破片が出土した。試掘坑⑥～⑧では、2層や遺構埋土(a・b層)から土師器や須恵器、山茶碗の破片が出土している。また、試掘坑⑥・⑧の6層では、7～8世紀の土師器がまとまって出土した。これらの調査結果により、開発予定地内の北側に遺跡の範囲がおよぶことが判明した。

第2節 基本層序(第5図・第6図)

調査区の層序は、南調査区と北調査区で対応する。1層は表土で、黄褐色砂質土が堆積している。2～9層は近世以降に堆積した層と考えられる。10・12・13層は包含層である。10層は暗橙色シルト質土で、中世～近世の包含層、12層が暗黄褐色シルト質土で、中世の包含層である。13層は褐色シルト質土で、古代～中世にかけての包含層であり、中世の遺構はこの層を掘り込んでいる。また、11層は堆積状況から遺構覆土の可能性が考えられる。さらに、土層の堆積状況から、調査区内に包含層が島畑状に取り残されている状況が確認できる。調査区内の地山は14～17層である。14層は黄褐色シルト質土で、包含層が掘削されていた部分では暗青灰色に変色している。15層は青灰色砂で、南調査区のみ確認された。16層は礫を多量に含む灰色砂、17層は礫を含まない灰色砂である。



第4図 調査区全体図



第5図 土層断面図(1)

北調查区北壁



第6図 土層断面図(2)

第3節 南調査区

(1)概要

南調査区では、遺構検出を14層上面で行った。遺構の覆土は褐色や暗褐色、暗黄褐色が多く、検出面が黄褐色であるため検出は比較的容易であった。しかし、調査区南側と東西端の地山が変色している範囲では、遺構覆土も変色しているため、検出は難しかった。遺構は調査区全体で見られ、溝18・土坑11・井戸3・小穴38を検出した。遺構の時期は中世が多いが、遺物や層位から中世以前と考えられる遺構はSD03・05・06・08～11・17とSK03・09・10、SE02、SP14である。

(2)遺構と遺物(第7図～第17図)

1. 溝

南調査区では複数の溝跡が確認されているが、以下では出土遺物から帰属時期が明確なものおよび特徴的なものについて報告する。

SD01(第7図・第9図) 調査区西端で検出した南北に延びる溝で、両端は調査区外に延びる。大きさは幅3.0～3.5m、検出面からの深さ0.5mとなる。覆土は6層あり、それぞれほぼ水平に堆積し、徐々に埋まっていったことがうかがえる。遺物は各層から出土するが、北側からの出土が多い傾向にある。

出土した遺物の内、山茶碗・小碗・小皿(第9図1～10)、ロクロかわらけ(第9図11・12)、須恵器壺(第9図13)、土師器瓶把手(第9図14)、移動式竈(第9図15)を図示した。遺構の年代は、検出面出土の山茶碗が13世紀初頭のものであるため、この時期には半分以上埋まっており、下層出土の山茶碗が12世紀後半のものであるため、これに近い時期に掘削されたと考えられる。

SD02(第4図・第9図) 調査区西端から東側に延びる溝で、西側は調査区外に延びる。大きさは幅0.5～0.7m、検出面からの深さ約0.15mとなる。溝の西端はSD01により切られているが、SD01と接合する可能性もある。覆土は、西端で黒灰色シルト質土、SD01より東側は暗褐色シルト質土が堆積している。遺物は少ないが、遺構全体から出土している。

出土した遺物の内、山茶碗(第9図16～21)、手づくねかわらけ(第9図22～24)、須恵器环身・坏蓋・壺(第9図25～28)を図示した。他に図示できなかったが、土師質器鍋がある。遺構の年代は、一部、13世紀後半の山茶碗も含むが、出土した遺物から13世紀前半と考えられる。

SD03(第8図・第9図) 調査区西側で検出した南北に延びる溝で、SD02に直交する。大きさは幅0.6～0.7m、検出面からの深さ0.1～0.15mとなり、SD02の底面よりも若干低く同一の遺構にはならないと判断した。また、遺構の両端は調査区外に延び、北に延長すると北調査区のSD205に重なるため、同一遺構の可能性が高いと考えられる。覆土は暗褐色シルト質土である。遺物の出土は少ないが、出土した遺物には山茶碗(第9図35)がある。遺構の年代は、土層断面より古代と考えられる。

SD04(第8図・第9図) 調査区西側で検出した南北に延びる溝で、南側は調査区外に延びる。大きさは幅0.7～0.9m、検出面からの深さ0.5mとなる。覆土は4層あり、ほぼ水平に堆積する。遺物は各層から出土し、完形に近い遺物はc層上面から出土した。また、d層からも遺物が出土しており、掘削されて間もない時期に混入した遺物と捉えられる。

出土した遺物の内、山茶碗・小皿(第9図29～34)を図示した。他に図示できなかったが、土師器、須恵器、かわらけがある。遺構の年代は、出土した遺物から13世紀前半～後半と考えられ、下層出土の遺物から13世紀前半に掘削されたと考えられる。

SD08～11(第8図・第9図) 調査区東側で検出した東西方向に延びる溝である。それぞれ幅0.4～0.5m、検出面からの深さ約0.1mとなり、SD08・10がやや小さくなる。溝はそれぞれ切り合っているが、

SD08・10は大きさ・方向がほぼ一致することから、同一の遺構の可能性が高い。遺物はそれぞれの溝から出土しているが、SD09底面から土師器が出土した。また、SD11上面から小型の土師器甕が3個体並んで出土したが、この遺構に伴うものかどうかの判断は難しい。

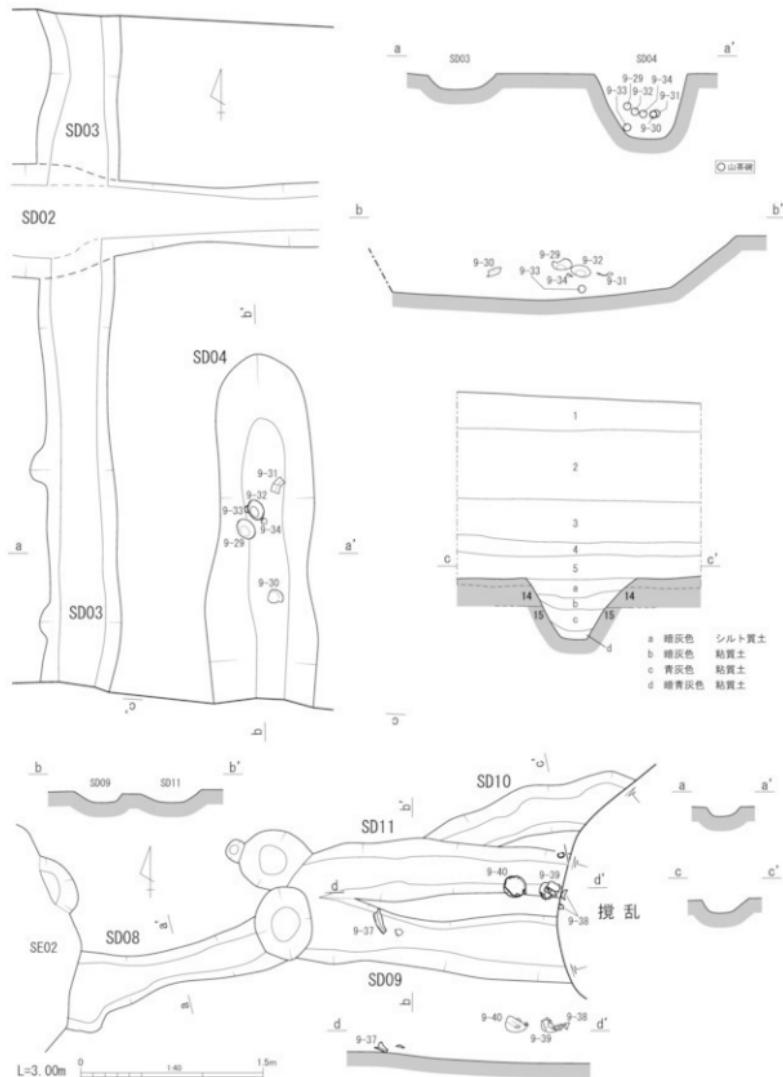
遺物はSD08・09から土師器、SD11から土師器・須恵器が出土しており、その内、SD09とSD11の土師器甕(第9図37~40)を図示した。SD11出土の土師器甕は、小型の耳が付き、器壁に煤が付着せず煮炊きに使われていないこと、赤彩される個体(第9図40)が含まれることから、瓶の模造品と考えられる。遺構の年代は、出土した遺物から8世紀代と考えられ、切り合ひ関係からSD08・10が古く、SD09・11が新しいと考えられる。

SD14(第10図～第12図) 調査区東側で検出した東西に延びる溝であり、両端は調査区外に延びる。大きさは幅2.0～2.4m、検出面からの深さ0.3mとなる。覆土は2層あり、上層が黒灰色シルト質土、下層



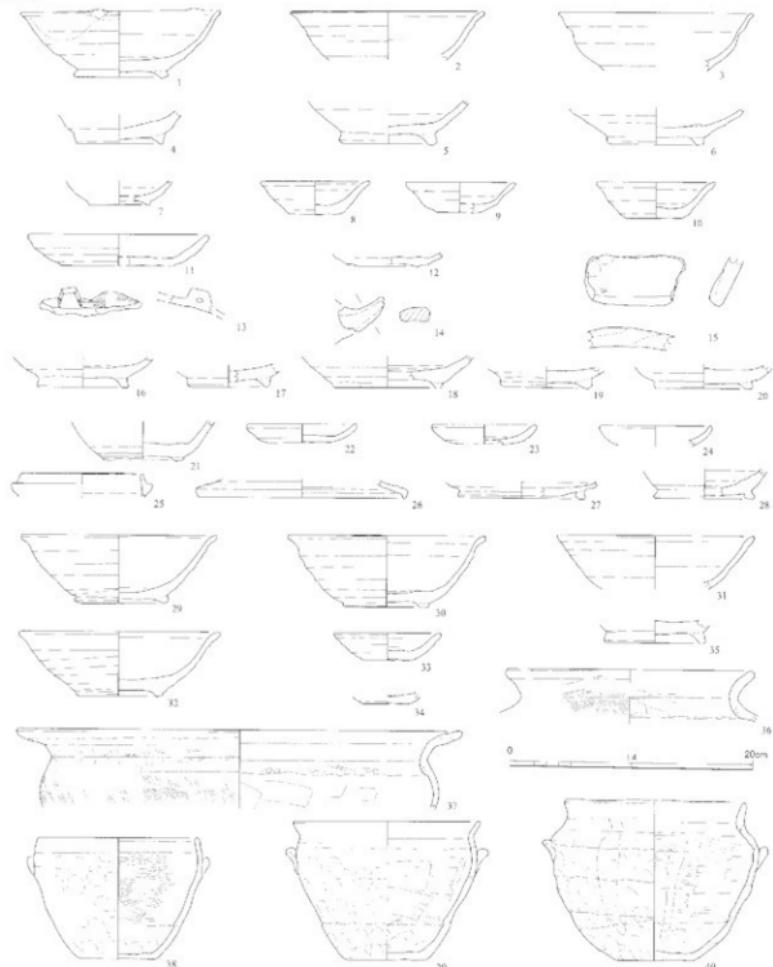
第7図 SD01 実測図

が暗青灰色シルト質土となる。遺物は遺構全体から出土しており、比較的残りの良い遺物は底面に近い位置からの出土が多い。また、遺構の検出面において陶馬が出土し、その周辺から土玉や馬歯、桃核が出土しているが、陶馬と遺構の年代には齟齬があり、遺構に伴うものではないと考えられる。

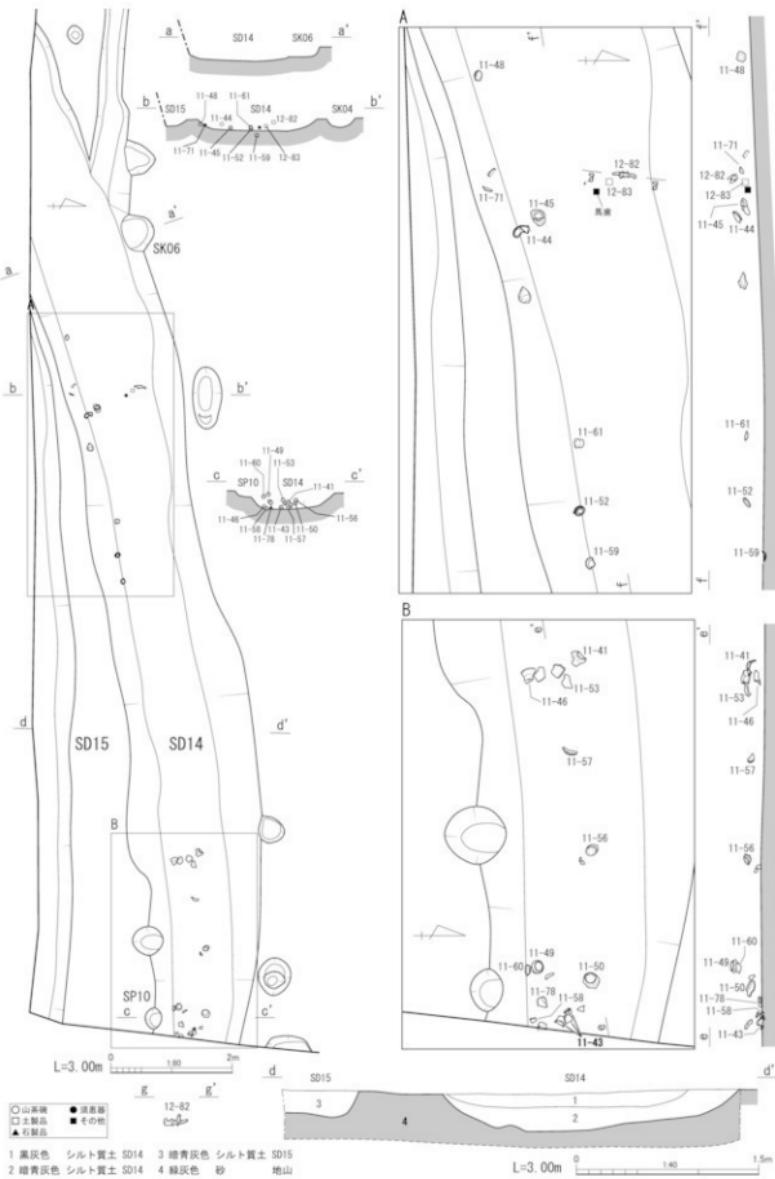


第8図 SD03・04・08～11実測図

出土した遺物の内、山茶碗・小碗(第11図41～61)、ロクロかわらけ(第11図62・63)、土師質土器鍋(第11図64～66)、貿易陶磁器(第11図67・68)、須恵器壺蓋・环身・鉢・甕(第11図69～73)、土師器碗・甕・瓶把手(第11図74～76)、砥石(第11図77・78)、陶馬(第12図82)、土製模造品玉(第12図83)を図示した。64・65の伊勢型鍋は定型化以前の形態と見られる。67は11世紀後半～12世紀前半の白磁皿である。68は13世紀前半の龍泉窯系青磁鎬蓮弁文碗である。82の陶馬は馬具が表現された飾り馬で、目・鼻・口は刺突、鞍や障泥、尻繁、耳は粘土を張り付けて表現される。その特長から、8世紀前半頃のものである。



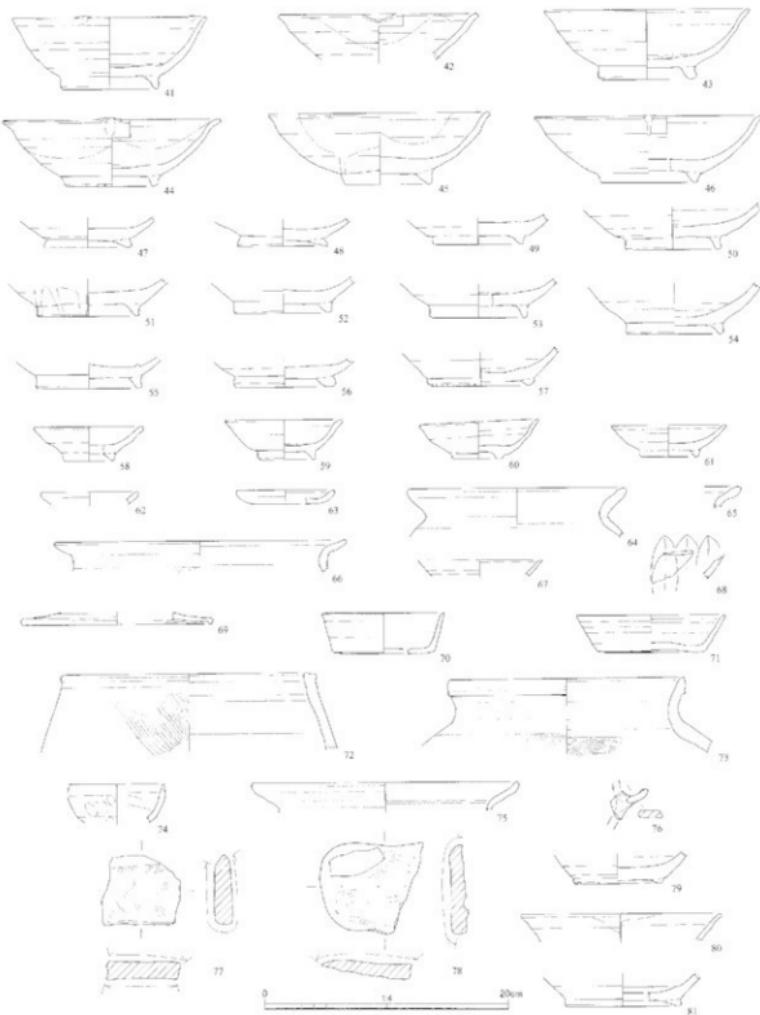
第9図 南調査区溝出土遺物



第10図 SD14・15 実測図

遺構の年代は、出土した遺物から12世紀後半～13世紀前半と考えられる。また、13世紀前半の山茶碗がほとんど含まれないことから、13世紀初頭頃には埋没し機能しなくなったと考えられる。

SD15(第10図・第11図) 調査区東側で検出した東西に延びる溝であり、両端と南側は調査区外に広がる。幅や長さは不明であるが、検出面からの深さは約0.2mとなる。覆土は1層で、暗青灰色シルト質土が堆積する。出土した遺物は少ないが、土器・須恵器・山茶碗(第11図79)が出土している。遺構



第11図 SD14～16 出土遺物

の年代は、出土した遺物から13世紀後半と考えられる。

SD16(第4図・第11図) 調査区東側で検出した東西に延びる溝であり、東側はSD14により切られる。大きさは幅0.4~0.7m、検出面からの深さ約0.1mとなる。覆土は暗褐色シルト質土で、南半は暗青灰色に変色している。出土した遺物には、土師器・山茶碗(第11図80・81)がある。遺構の年代は、出土した遺物から13世紀前半と考えられる。

2. 土坑

南調査区で検出した土坑は、規模が小さく遺物の出土も少なかった。そのため、帰属時期については不明確であるが、出土遺物からSK01・02・05・08が中世、SK03・04・06・07が古代と考えられる。SK01(第13図・第15図) 調査区中央付近で検出した土坑である。平面形は楕円形で、底面が狭く漏斗状になる。大きさは東西約1.0m、南北約0.6m、検出面からの深さ約0.4mとなる。覆土は褐色粘質土である。遺物の出土は少ないが、遺構の斜面に沿うような状態で、残りの良い遺物が出土している。

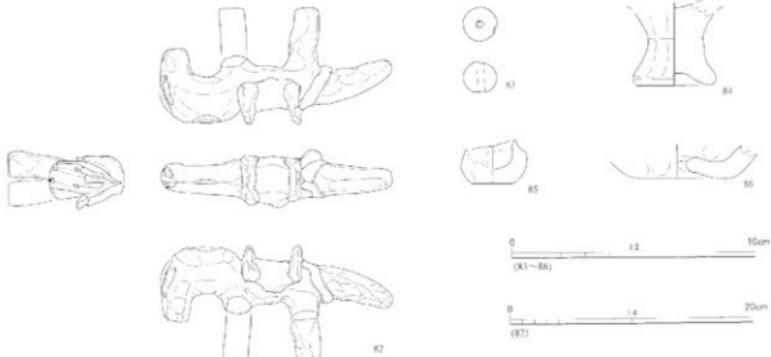
出土した遺物には、土師器・須恵器(第15図89)・山茶碗(第15図87)・かわらけ(第15図88)がある。遺構の年代は、出土した遺物から13世紀前半と考えられる。

SK03(第13図・第15図) 調査区東側で検出した土坑である。北側はSK05により切られているが、平面形は楕円形となる。大きさは東西約0.5m、南北約0.6m、検出面からの深さは0.15mとなる。覆土はにぶい黄褐色シルト質土である。遺物は検出面において、土師器の小破片が2箇所に敷き詰められた状態で出土している。また、底面からはほぼ完形の須恵器坏身が出土し、底部外面には墨書が施されている。

出土した遺物の内、須恵器坏身(第15図90)を図示した。90は断面形が箱形で、底部外面には墨書があり、「石」の可能性が考えられる。遺構の年代は、出土した遺物から8世紀後半頃と考えられる。

SK05(第13図・第15図) 調査区東側で検出した土坑である。平面形はほぼ円形で、大きさは直径約0.8m、検出面からの深さ約0.35mとなる。覆土は2層あり、土色はいずれも暗青灰色であるが、上層がシルト質土、下層が粘質土になる。出土した遺物には、土師器・須恵器・山茶碗(第15図91・92)がある。遺構の年代は、出土した遺物から12世紀後半頃と考えられる。

SK07(第13図・第15図) 調査区東側で検出した土坑である。平面形は楕円形で、大きさは約3.8×0.9m、検出面からの深さ約0.1mで、底面は西側に向かって高くなる。覆土は暗青灰色シルト質土である。遺物の出土はほとんどなく、底面からは若干浮いた状態で須恵器坏蓋が出土している。出土した遺物には、



第12図 SD14, 包含層出土土製品

須恵器壺蓋(第15図94)と土師器壺(第15図95)、土師器甕(第15図96)がある。遺構の年代は、出土した遺物から7~8世紀頃と考えられる。

3. 井戸

SE01(第14図) 調査区西側で検出した遺構で、南側は調査区外にかかる。平面形はほぼ円形になると見えられ、大きさは直径約1.4mで、検出面からの深さ約0.7mとなる。遺構内からは井戸側などの痕跡は確認できなかった。出土した遺物には、土師器・須恵器・山茶碗があるが、小破片のため図示できるものはなかった。遺構の年代は、出土した山茶碗から13世紀代と考えられる。

SE02(第14図・第15図) 調査区中央付近で検出した遺構で、西側はSD07、東側はSD08と接する。平面形はやや梢円形で、大きさは2.6m×2.1m、検出面からの深さ約0.7mとなる。覆土は13層確認でき、堆積状況から、数回掘り返された可能性があり、井戸側などを持たない素掘りの井戸であったと見られる。遺構の断面形が半円状で、土層の堆積状況からは井戸跡とする積極的根拠は少ないが、基盤層を深く掘り込むため井戸跡と判断した。遺物は各層から見られるが、1層や上層に多く、下層での出土は少ない。

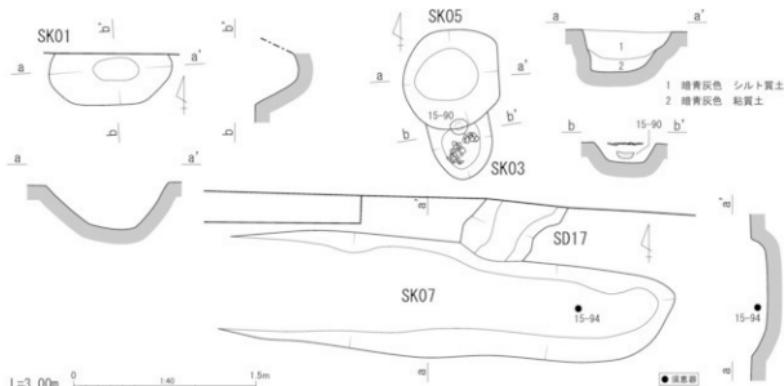
出土した遺物の内、山茶碗・小皿(第15図98~100)、須恵器壺蓋・壺身・壺・甕(第15図101~104)、土師器壺身・鉢・甕(第15図105~108)、土製品把手(第15図109~113)、陶馬(第15図114)、弥生土器壺(第15図115)を図示した。遺構の年代は、出土した遺物の多くが8世紀代のものであり古代と考えられるが、出土した山茶碗がSE01の山茶碗と接合関係にあり、13世紀頃まで利用されていた可能性がある。

SE03(第14図・第15図) 調査区東側で検出した遺構である。平面形はほぼ円形で、大きさは直径約1.3m、検出面からの深さ約0.7mとなる。覆土は6層確認でき、井戸側などの痕跡はなかったが、5層は水溜の痕跡と考えられる。遺物の出土は少ないと、6層から完形の山茶碗小碗が出土している。

出土した遺物の内、山茶碗・小碗(第15図116~120)と土師器甕(第15図121・122)を図示した。他に図示できなかったが、須恵器、土師質土器鍋、桃核が出土している。遺構の年代は、出土した遺物から12世紀後半~13世紀前半と考えられ、6層出土の山茶碗小碗から、12世紀中頃に掘削されたと考えられる。

4. 小穴(第14図・第15図)

南調査区からは多数の小穴を検出したが、SP02が柱穴と考えられる他は、用途は不明である。また、小穴から土師器・須恵器・山茶碗が出土しているが、いずれも小破片で図示できる遺物はSP02から出土した土師器壺(第15図97)だけであった。第15図97は、古墳時代の二重口縁壺の口縁部であるが、



第13図 南調査区土坑実測図

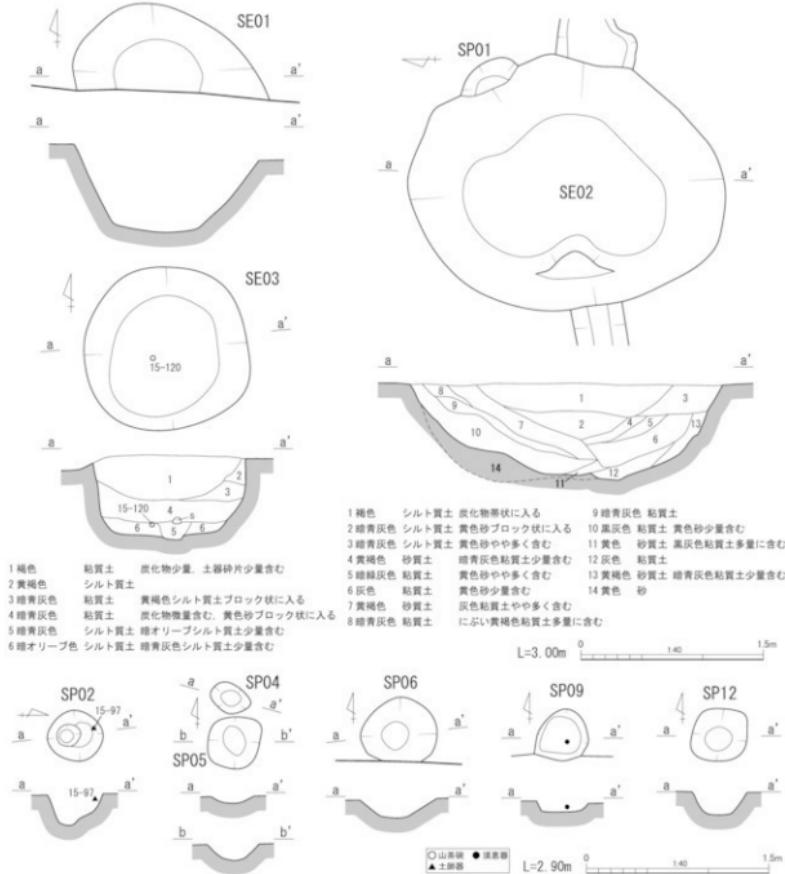
直接遺構の時期を表しているとは考えにくい。

小穴の年代は、出土遺物が少なく明確ではないが、SP13は山茶碗が出土していることから13世紀代、SP01~10・12は土師器や須恵器が出土していることから中世以前と考えられる。

(3) 包含層出土遺物(第12図・第16図・第17図)

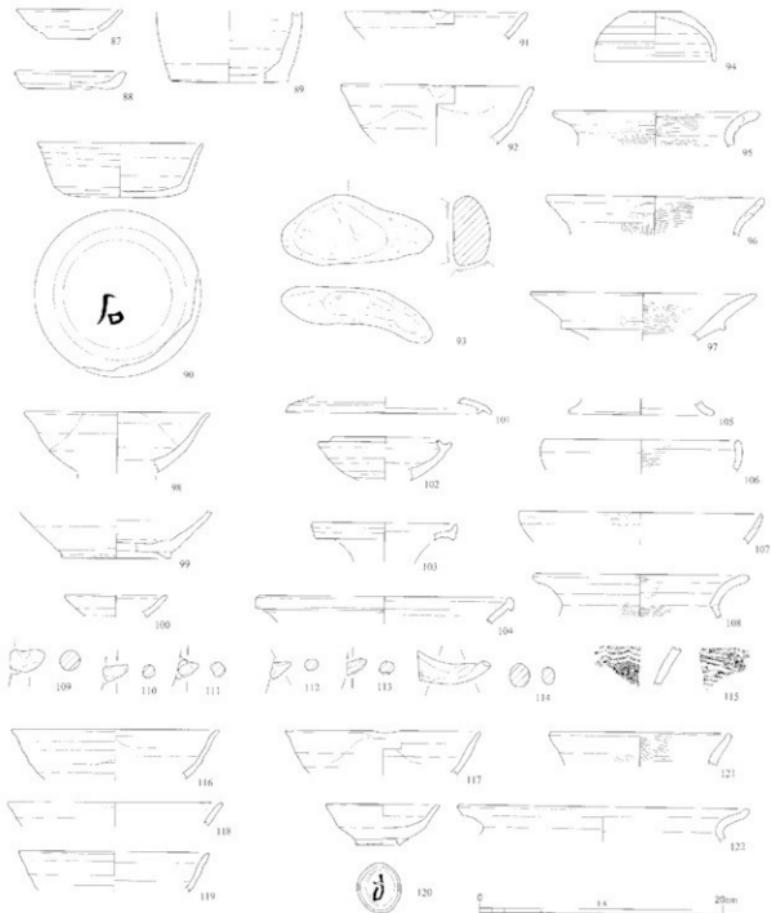
第12図84~86、第16図123~179、第17図180~208に南調査区包含層から出土した遺物を図示した。

第12図84~86は土製模造品で、84が高环形、85が环形、86が瓶形である。第16図123~143は12世紀中頃~13世紀後半の山茶碗である。144~146~152は手づくねかわらけで、148には内面に成形段階のハケメが見られる。151~152は口縁部付近のみナデるもので、体部下位に指頭圧痕が残り、他の手づくねかわらけと調整がやや異なる。145~153~154はロクロかわらけである。155~156は12~13世紀

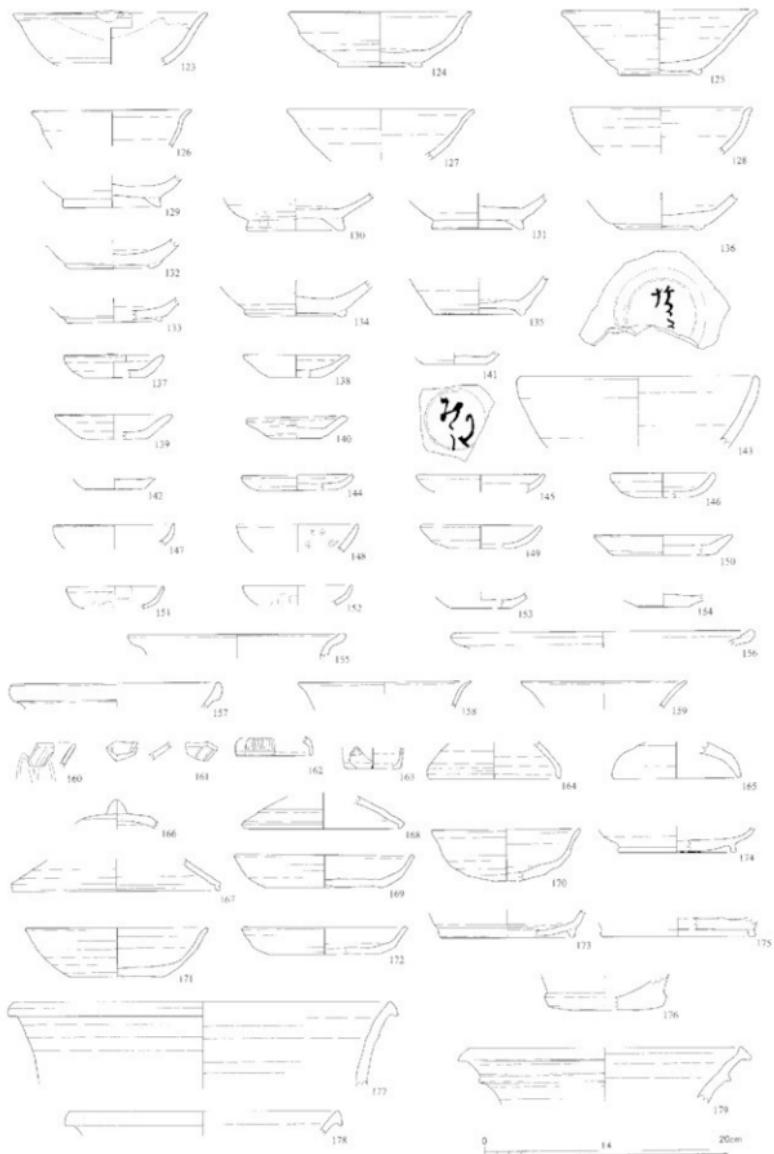


第14図 南調査区井戸・小穴実測図

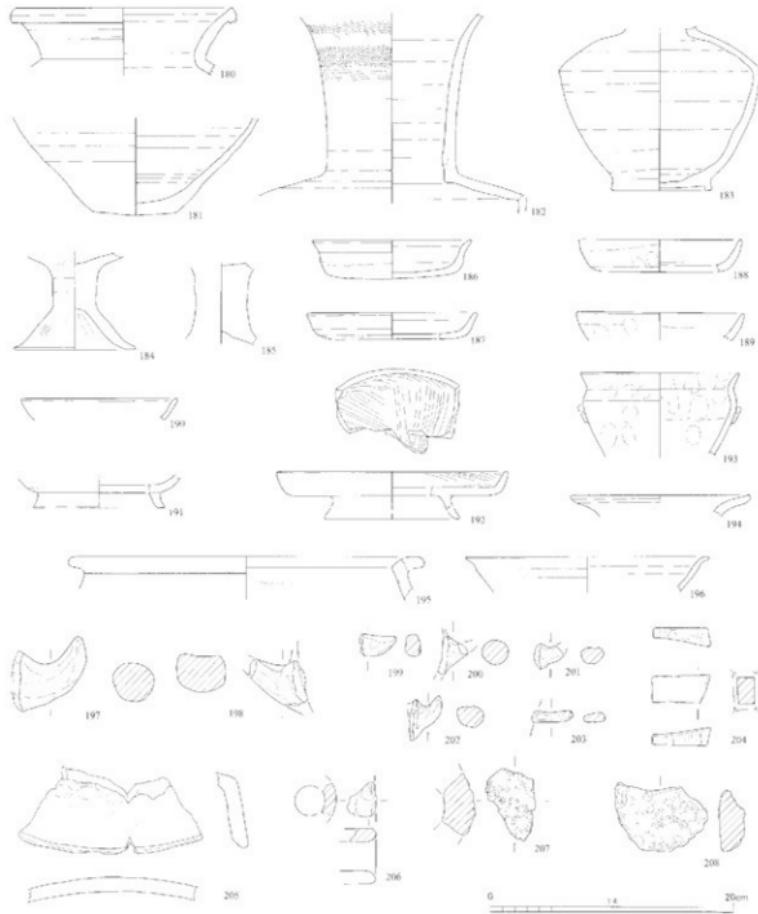
頃の伊勢型鍋である。157～159・161は白磁で、157が12世紀後半、158・159が13世紀後半～14世紀初頭、161が12世紀代の碗である。160・162は青磁で、160が13世紀前半の龍泉窯系青磁蓮弁文碗、162が合子蓋である。163は器種不明の青白磁である。164～183は7～9世紀の須恵器で、164～168が环蓋、169～172が环身、173～175が高台付环である。182は長頸壺頸部で、波状文が頸部上半に施される。183は長頸壺で、頸部を除いて完全な形で出土した。184～195・197～203は土師器である。184・185は6世紀頃の高环脚部、186～189は8世紀頃の内外面赤彩される环身である。190も环身で、内面が黒色処理される。192は8世紀頃の高台付皿で、高台内側を除き赤彩され、内面には暗文が施される。193は耳付きの小型甕で、瓶の模造品と見られ、内面口縁部付近に舌状の赤彩が施される。195は10～



第15図 南調査区土坑・井戸・小穴出土遺物



第16図 南調査区包含層出土遺物(1)



第17図 南調査区包含層出土遺物(2)

11世紀頃の清郷型甕、197～203は瓶の把手である。196は9世紀の灰釉陶器碗で、内面のみに施釉される。204は砥石で、3面に使用痕が確認できる。205は移動式竈、206・207は鞴の羽口、208は鉄滓である。

第4節 北調査区

(1)概要

北調査区では、遺物の出土が顕著であった範囲は13層上面で、その他の範囲では14層上面で遺構検出を行った。遺構の覆土は暗褐色や暗青灰色が多く、13層上面で検出した遺構はいずれも黒褐色で

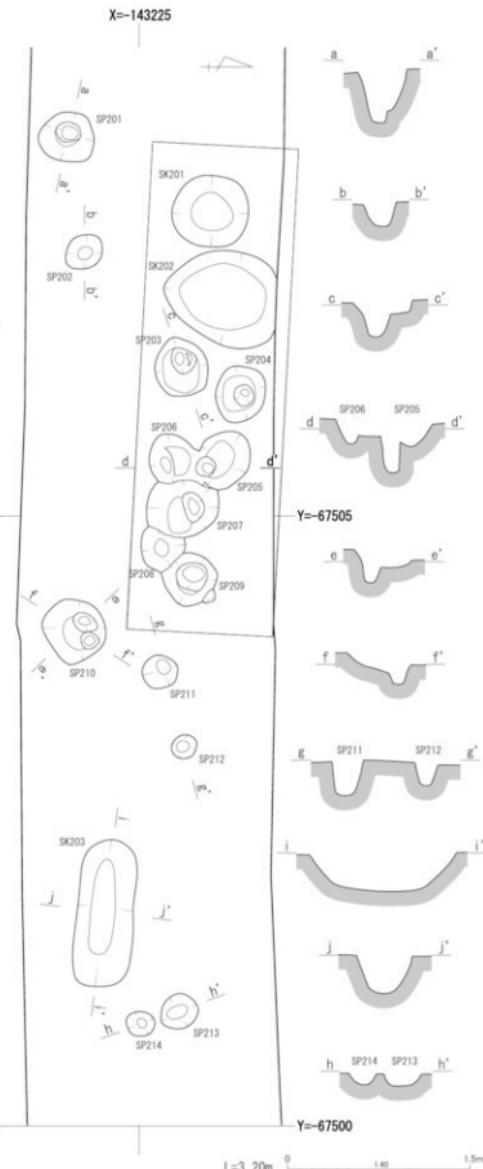
あった。13層は褐色で遺構検出は困難なように思われたが、遺構の覆土は黒褐色で炭化物や土器片を多く含むため、比較的容易に行えた。しかし、上層で検出した遺構の多くは14層まで掘り込まれておらず、13層上面で検出しきれなかった遺構は、13層を掘削する際に消失してしまった可能性が高い。そのため、包含層出土の中世遺物の中には、遺構に伴うものが含まれている可能性がある。遺構は調査区全体で見られ、上層で土坑3・小穴14、下層で溝8・土坑5・井戸2・小穴65を検出した。遺構の時期はおおむね中世と考えられ、古代までさかのほる遺構はほとんど検出できなかった。そのため、古代の遺構は北調査区の外側に広がっていたと考えられる。また、小穴は多数検出したものの、調査範囲が狭いこともあります。建物を復元するまでには至らなかった。なお、北調査区の遺構番号は、南調査区の遺構番号との混同をさけるため、200番台から付けた。

(2) 遺構と遺物(第18図～第25図)

1. 上層遺構群

SK201(第18図～第20図) 上層遺構群西側で検出した土坑である。平面形はほぼ円形で、大きさは直径0.65m、検出面からの深さ約0.2mとなる。覆土は黒褐色粘質土で、炭化物や土器小片をやや多く含む。遺物は覆土全体から出土し、残りの良い遺物は底面から浮いた状態で出土している。

出土した遺物の内、山茶碗(第20図1～4)とかわらけ(第20図5～16)を図示した。他に図示できなかつたが、土師器と須恵器がある。第20図1～4は山茶碗の小皿である。第20図5～16



第18図 北調査区上層遺構群全体図

は手づくねかわらけで、小型の5~12と大型の13~16の2種類がある。遺構の年代は、出土した遺物から13世紀後半頃と考えられる。

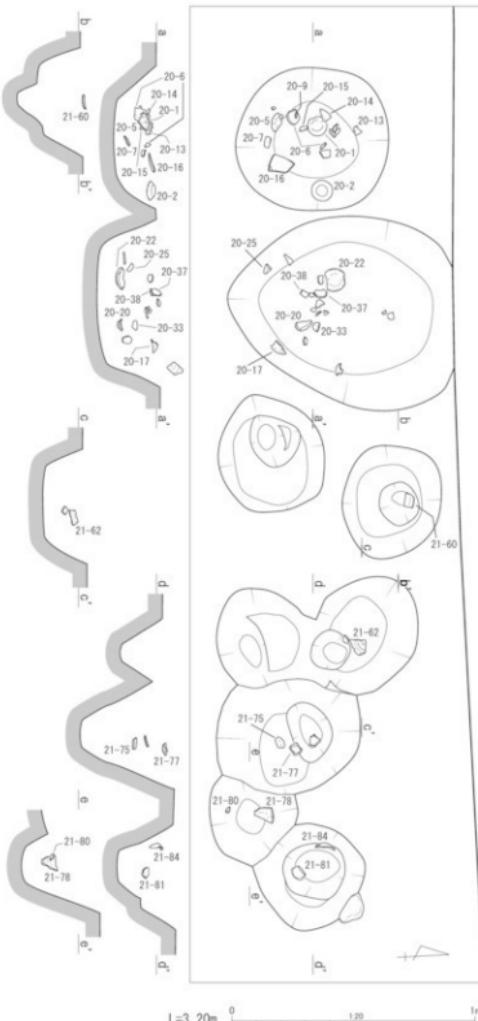
SK202(第18図~第20図) 上層遺構群西側で検出した土坑で、北側の一部は調査区外にかかる。平面形は楕円形で、大きさは $1.0 \times 0.8m$ 、検出面からの深さ約0.25mとなる。覆土は黒褐色粘質土で、炭化物や土器小片をやや多く含む。遺物は覆土全体から出土しているが、残りの良いものは南側に集中し、底面から浮いた状態で出土している。

出土した遺物の内、山茶碗(第20図17~24)とかわらけ(第20図26~41)、白磁(第20図25)、陶馬(第20図42)を図示した。他に図示できなかったが、土師器、須恵器、轆の羽口がある。第20図17~20は山茶碗、21は小碗、22~24は小皿である。第20図26~38は手づくねかわらけで、小型の26~35と大型の36~37がある。また、小型のかわらけには、内湾する器形(26~31)と体部が直線的に立ち上がる器形(32~33)、口が折れる器形(34)の3形態が見られる。第20図39~41はロクロかわらけである。第20図25は玉縁口縁の白磁碗である。遺構の年代は、出土した遺物から13世紀前半頃と考えられる。

SK203(第18図・第20図) 上層遺構群東側で検出した土坑である。平面形は東西に長い楕円形で、大きさは $1.2 \times 0.45m$ 、検出面からの深さ0.3mとなる。覆土は黒褐色粘質土で、炭化物や土器小片をやや多く含む。

出土した遺物には、土師器・山茶碗・かわらけがあり、その内、山茶碗(第20図43~45)とロクロかわらけ(第20図46~47)を図示した。遺構の年代は、出土した遺物から13世紀前半~中頃と考えられる。

SP201(第18図・第21図) 上層遺構群西側で検出した小穴で、柱痕が確認できることから柱穴と考えられる。平面形はほぼ円形で、大きさは直径0.4m、検出面からの深さ0.4mとなる。



第19図 北調査区上層遺構群出土状態図

覆土は黒褐色粘質土で、炭化物や土器小片をやや多く含む。

出土した遺物には、土師器・山茶碗・かわらけがあり、その内、山茶碗(第21図49・50)と手づくねかわらけ(第21図51・52)を図示した。

遺構の年代は、出土した遺物から13世紀中頃～後半頃と考えられる。

SP202(第18図・第21図) 上層遺構群西側で検出した小穴である。平面形は円形で、大きさは直径0.3m、検出面からの深さ0.2mとなる。覆土は黒褐色粘質土で、炭化物や土器小片をやや多く含む。

出土した遺物には、山茶碗・かわらけがあり、その内、山茶碗小皿(第21図53)を図示した。遺構の年代は、出土した遺物から13世紀代と考えられる。

SP203(第18図・第19図・第21図) 上層遺構群西側で検出した小穴で、柱痕が確認できることから柱穴と考えられる。平面形は円形で、大きさは直径0.45m、検出面からの深さ0.25mとなる。覆土は黒褐色粘質土で、炭化物や土器小片をやや多く含む。

出土した遺物には、山茶碗・かわらけがあり、その内、第21図54の山茶碗と55の小皿、56の手づくねかわらけを図示した。遺構の年代は、出土した遺物から13世紀中頃～後半頃と考えられる。

SP204(第18図・第19図・第21図) 上層遺構群西側で検出した小穴で、柱痕が確認できることから柱穴と考えられる。平面形は円形で、大きさは直径0.45m、検出面からの深さ0.25mとなる。覆土は黒褐色粘質土で、炭化物や土器小片をやや多く含む。遺物は覆土全体から出土し、検出面で白磁が出土している。

出土した遺物の内、山茶碗小皿(第21図57)と手づくねかわらけ(第21図58・59)、白磁碗(第21図60)を図示した。遺構の年代は、出土した遺物から13世紀前半と考えられる。

SP205(第18図・第19図・第21図) 上層遺構群中央付近で検出した小穴で、南側がSP206と切り合い、柱痕が確認できることから柱穴と考えられる。しかし、南側は切り合いが多く、柱痕も南側に外れていることから、別の小穴がSP205とSP206の間にある可能性も考えられる。平面形は円形で、大きさは直径0.45m、検出面からの深さ0.4mとなる。覆土は黒褐色粘質土で、炭化物や土器小片をやや多く含む。遺物は覆土全体から出土し、底面から浮いた状態で山茶碗が出土している。また、柱痕内からもかわらけや山茶碗小皿が出土している。

出土した遺物の内、山茶碗・小皿(第21図61～63)とかわらけ(第21図64～69)、土師質土器(第21図70)を図示した。他に図示できなかったが、須恵器がある。64～68は手づくねかわらけで、いずれも小型の器形である。69はロクロかわらけであるが、底部の糸切痕は不明瞭である。70は土師質土器の鍋で、伊勢型鍋の口縁部である。遺構の年代は、出土した遺物から13世紀前半頃と考えられる。

SP206(第18図・第19図・第21図) 上層遺構群中央付近で検出した小穴で、柱痕が確認できることから柱穴と考えられる。また、北側がSP205、東側がSP207と切り合っているが、覆土が非常に似ているため、切り合い関係は判断できなかった。平面形は円形で、大きさは直径0.4m、検出面からの深さ0.2mとなる。覆土は黒褐色粘質土で、炭化物や土器小片をやや多く含む。出土した遺物には、山茶碗・かわらけがあるが、いずれも小破片のため図示できるものはなかった。

遺構の年代は、出土した遺物から13世紀前半頃と考えられる。

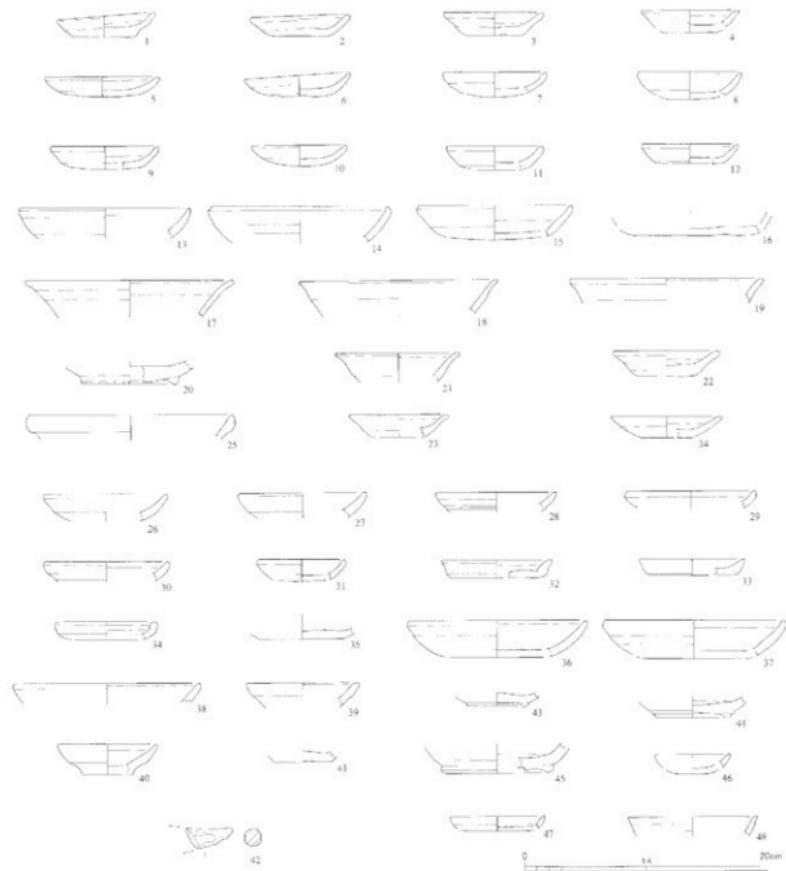
SP207(第18図・第19図・第21図) 上層遺構群中央付近で検出した小穴で、柱痕が確認できることから柱穴と考えられる。また、西側がSP206、東側がSP208と切り合っているが、覆土が非常に似ているため、切り合い関係は判断できなかった。平面形は南北に若干長い楕円形で、大きさは0.6×0.5m、検出面からの深さ0.4mとなる。覆土は黒褐色粘質土で、炭化物や土器小片をやや多く含む。遺物は覆土全体から出土しているが、残りの良い遺物は検出面に近い位置で出土している。

出土した遺物の内、山茶碗(第21図71～73)とかわらけ(第21図74～76)、天目茶碗(第21図77)を図示し

た。他に図示できなかったが、土師器と須恵器がある。71は山茶碗で、灰釉が漬け掛けされる。72は小瓶、73は小皿である。74・75は手づくねかわらけで、小型の器形である。76はロクロかわらけで、内湾する器形である。77は天目茶碗の底部で、中国産と考えられる。遺構の年代は、出土した山茶碗に古い様相が見られるが、小皿が出土していることから13世紀前半頃と考えられる。

SP208(第18図・第19図・第21図) 上層遺構群中央付近で検出した小穴で、西側がSP207、東側がSP209と切り合っているが、覆土が非常に似ているため、切り合い関係は判断できなかった。平面形は円形で、大きさは直径0.45m、検出面からの深さ0.3mとなる。覆土は黒褐色粘質土で、炭化物や土器小片をやや多く含む。遺物は覆土全体から出土し、底面から若干浮いた状態で山茶碗と青白磁が出土している。

出土した遺物の内、山茶碗・小皿(第21図78・79)と青白磁合子(第21図80)を図示した。他に図示できなかったが、かわらけがある。遺構の年代は、出土した遺物から13世紀中頃～後半頃と考えられる。



第20図 SK201・202・203・205出土遺物

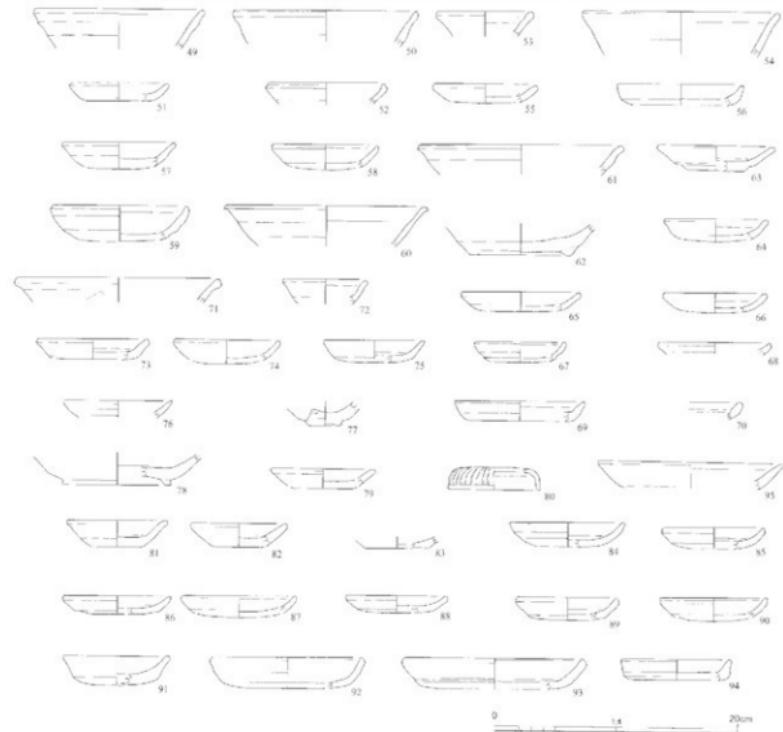
SP209(第18図・第19図・第21図) 上層遺構群中央付近で検出した小穴で、柱痕が確認できることから柱穴と考えられる。また、西側がSP208と切り合っている。平面形は円形で、大きさは直径0.45m、検出面からの深さ0.2mとなる。覆土は黒褐色粘質土で、炭化物や土器小片をやや多く含む。遺物は覆土全体から出土しているが、残りの良い遺物は底面から浮いた状態で出土している。

出土した遺物には、須恵器・山茶碗・かわらけがあり、その内、山茶碗小皿(第21図81~83)とかわらけ(第21図84~94)を図示した。84~94は手づくねかわらけであり、小型の84~91、94と大型の92・93が見られる。遺構の年代は、出土した遺物から13世紀前半~中頃と考えられる。

SP210(第18図) 上層遺構群中央付近から東側で検出した小穴で、柱痕と見られる痕跡が2箇所あり、複数の遺構が切り合っている可能性がある。平面形は円形で、大きさは直径0.5m、検出面からの深さ0.25mとなる。覆土は黒褐色粘質土で、炭化物や土器小片をやや多く含む。出土した遺物には、土師器・山茶碗・かわらけがあるが、小破片が多く図示できるものはなかった。遺構の年代は、出土した遺物に山茶碗が含まれていることから、13世紀代と考えられる。

SP211(第18図・第21図) 上層遺構群東側で検出した小穴である。平面形は円形で、大きさは直径0.3m、検出面からの深さ0.25mとなる。覆土は黒褐色粘質土で、炭化物や土器小片をやや多く含む。

出土した遺物には、山茶碗・かわらけがあり、その内、第21図95の手づくねかわらけを図示した。



第21図 SP201~211出土遺物

遺構の年代は、出土した遺物に山茶碗が含まれていることから、13世紀代と考えられる。

2. 溝

北調査区では複数の溝跡を検出したが、いずれも遺物の出土が少なく、遺構の帰属時期が不明確であるため、以下では出土遺物から帰属時期が明瞭なものおよび特徴的なものについて報告する。なお、出土遺物からはSD202・203・204が中世、SD201が古代と考えられる。

SD201(第22図・第24図) 調査区中央付近から東側で検出した東西に延びる溝である。大きさは長さ10.8m、幅0.24m~0.48m、検出面からの深さ約0.1mとなる。覆土は暗褐色シルト質土である。

出土した遺物には、土師器・須恵器・鉄滓があり、第24図142の須恵器坏身を図示した。遺構の年代は、SP201に切られていることと、出土した遺物から8~9世紀頃と考えられる。

SD205(第4図) 調査区西側で検出した南北に延びる溝で、北側と南側は調査区外に延びる。大きさは幅0.4m、深さ0.2mとなる。

遺構の年代は、出土した遺物がなかったため不明であるが、SD03と同じ時期と考えられる。

SD206(第4図) 調査区西側で検出した南北に延びる溝で、北側と南側は調査区外に延びる。大きさは幅3.1m、深さ約0.2mとなる。上部は削平されているが、比較的大きな遺構でSD01との関連をうかがえるものの、軸がずれていることや底面の標高が大きく違うことから、別の遺構と考えられる。

遺構の年代は、出土した遺物がなく、さらに上部が削平され掘り込み面が確認できなかつたため不明である。

3. 土坑

SK204(第23図) 調査区西側から中央付近にかけて検出した土坑で、北側の一部は調査区外にかかる。平面形は円形で、大きさは直径約0.8m、深さ約0.15mとなる。出土した遺物には土師器があるが、小破片のため図示できなかつた。

遺構の年代は、出土した遺物に中世のものが含まれていないことから、中世以前の可能性が高いと考えられる。

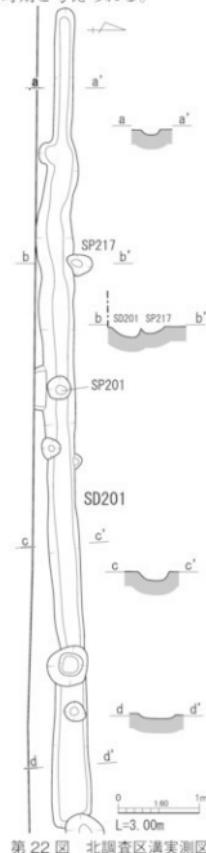
SK205(第20図・第23図) 調査区西側で検出した土坑である。平面形は梢円形で、大きさは0.9m×0.6m、検出面からの深さ0.1mとなる。覆土は暗青灰色シルト質土である。

出土した遺物には、土師器(第20図48)がある。48は土師器坏であるが、器形や調整技法から焼成不良の須恵器の可能性もある。遺構の年代は、中世の遺物が含まれていないことから、古代と考えられる。

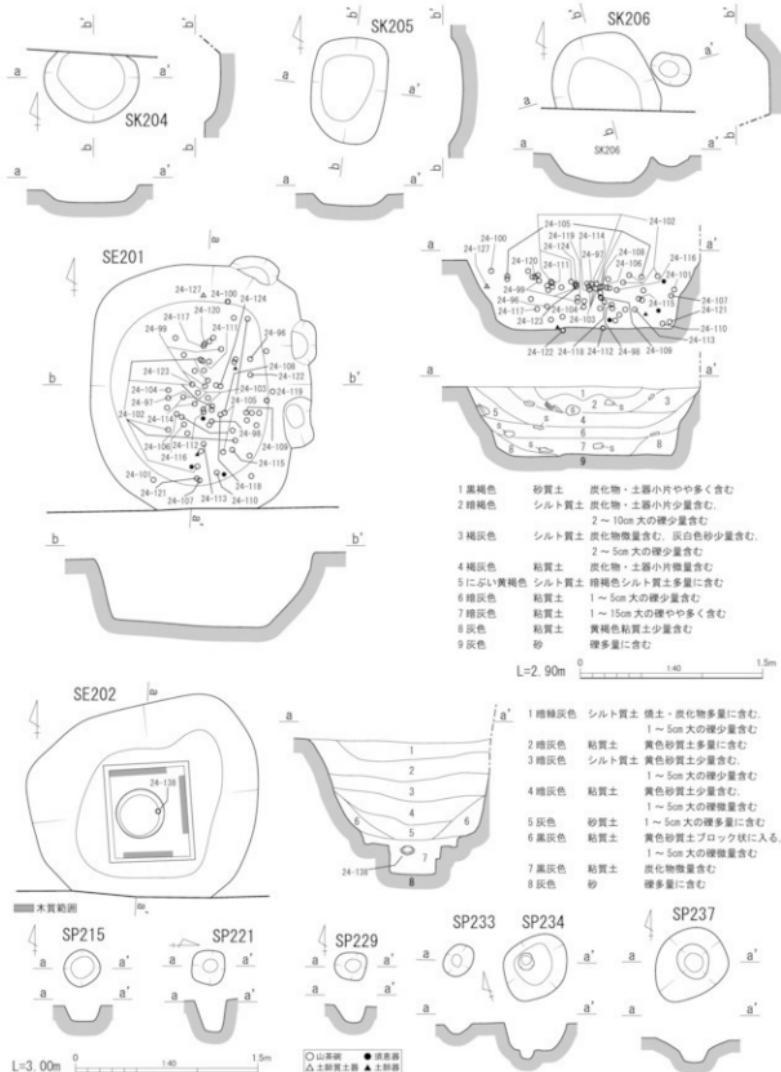
SK206(第23図) 調査区西側で検出した土坑であり、南側は調査区外にかかる。遺構の平面形は梢円形と考えられ、大きさは東西0.8m、検出面からの深さ0.3mとなる。出土した遺物には、土師器・須恵器・山茶碗があるが、いずれも小破片のため図示できなかつた。遺構の年代は、出土した遺物に山茶碗が含まれていることから、13世紀代と考えられる。

4. 井戸

SE201(第23図・第24図) 調査区中央付近で検出した遺構で、南側の一部は調査区外にかかる。平面形は梢円形で、大きさは1.8m×2.1m、検出面



第22図 北調査区溝実測図



第23図 北調査区土坑・井戸・小穴実測図

からの深さは0.55mとなる。底面や土層の堆積状況からは井戸側などの痕跡は確認できず、素掘りの井戸と考えられる。覆土は8層あり、遺物は各層から出土しているが、2層と4層からの出土が多い。

出土した遺物の内、山茶碗(第24図96~125)とロクロかわらけ(第24図126)、土師質土器(第24図127)、須恵器(第24図128~131)、土師器(第24図132~134)、砥石(第24図135)、土製品(第24図136)を図示した。他に図示できなかったが、灰釉陶器と中世陶器がある。96~110は山茶碗、111~122は小碗、123・124は小皿、125は片口鉢である。127は土師質土器鍋で、古代の土師器甕の系譜をひくものと見られる。128~131は須恵器である。128は6世紀後半、129は8世紀後半~9世紀初頭の坏蓋で、130は7世紀代の坏身である。131は壺の底部と考えられる。132~134は土師器である。132は8世紀後半~9世紀初頭の坏身で、133は鉢である。134は8~9世紀の甕である。135は砥石で、各面に使用痕が確認できる。136は土鍤である。遺構の年代は、出土した遺物から12世紀中頃~13世紀初頭と考えられる。

SE202(第23図・第24図) 調査区東側で検出した遺構で、南側の一部は調査区外にかかる。平面形はややいびつな円形で、大きさは直径約1.9m、検出面からの深さ1.1mとなる。底面には井戸側と水溜の痕跡があり、ほとんど朽ちて原形を留めていなかったが、木質が遺存していた。井戸側は方形で、厚さ4cm程度の板が組まれていたと考えられる。水溜には円形の曲げ物が使用されており、底面を20cm程度掘りくぼめて据え付けられていた。覆土は7層あり、井戸側を抜き取った後に埋められたと考えられる。また、1層には焼土や炭化物が多く含まれており、埋める際に火を焚くような行為が行われたと見られる。遺物の出土は少なく、水溜内で山茶碗の底部完形品が出土しており、1層からは近世磁器が出土している。

出土した遺物の内、山茶碗(第24図137・138)と須恵器(第24図139)、近世磁器(第24図140)、瓦質土器(第24図141)を図示した。他に図示できなかったが、土師器、かわらけ、土師質土器、中世陶器がある。138は水溜内から出土した山茶碗であり、外面全体に煤が付着している。140は近世磁器の小碗、141は瓦質土器の碗皿類であり、ともに遺構の上面から出土している。遺構の年代は、水溜内から出土した遺物を参考とすると13世紀前半~中頃であるが、1層では近世磁器が出土しているため、時期は近世になる可能性も考えられる。

5. 小穴(第23図)

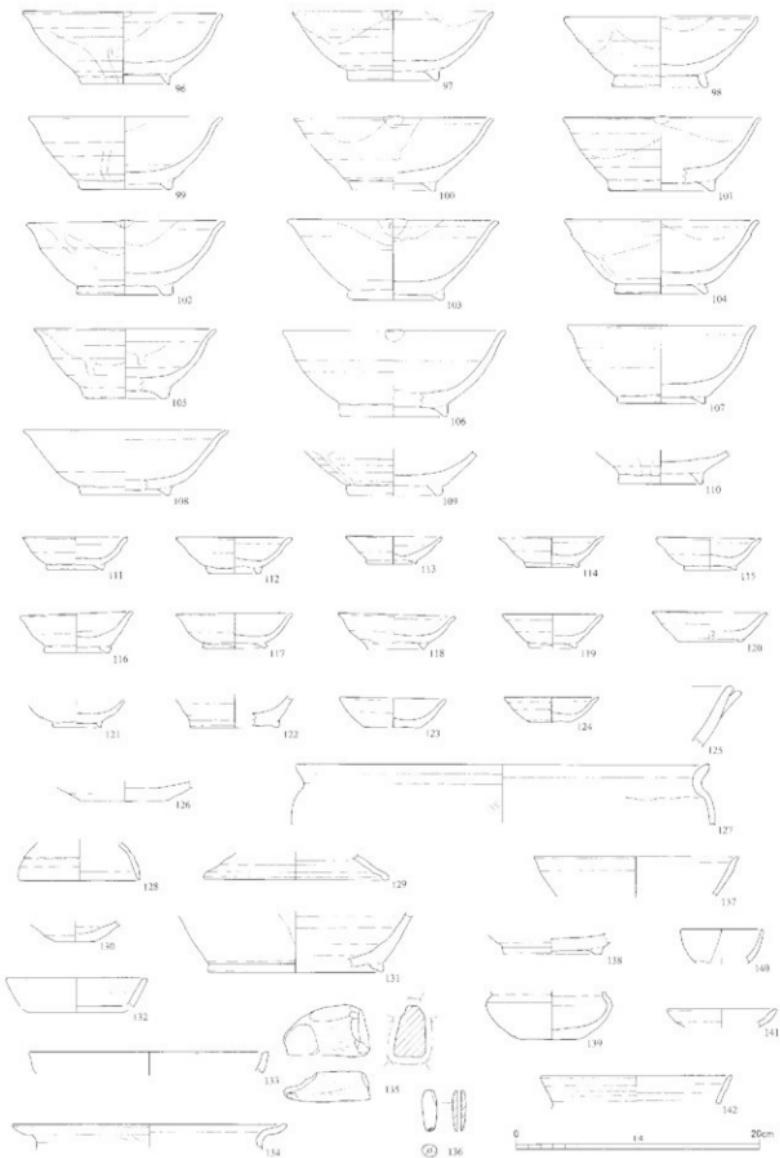
北調査区の下層からは多数の小穴を検出したが、SP234が柱穴と考えられる他は、用途は不明である。また、小穴からは土師器・須恵器・山茶碗・かわらけなどが出土しているが、いずれも小破片であり図示できる遺物はなかった。

小穴の年代は、出土遺物が少なく不明瞭であるが、SP217・219・221・224~228・230~232・234・237・238・240からは山茶碗やかわらけが出土していることから、13世紀代と考えられる。また、SP215・216・223・229・233・235・239からは土師器や須恵器が出土していることから、中世以前と考えられる。

(3) 包含層出土遺物

第25図143~174に北調査区の包含層から出土した遺物を図示した。

143は弥生土器壺の口縁部片である。内面に連弧文が見られ、弥生時代中期前葉の丸子式と考えられる。144は6世紀頃の土師器鉢形坏部高坏の脚部である。145~148は須恵器である。145・146は8世紀頃の坏蓋である。147は8世紀中頃の高台付坏で、腰部が明瞭に折れるものである。148は8世紀頃の無台碗である。149は8世紀後半~9世紀初頭の土師器坏、150は8世紀頃の土師器甕の口縁部片である。151は灰釉陶器碗の底部で、高台形が三日月状を呈し、9世紀後半のものと考えられる。152~155は山

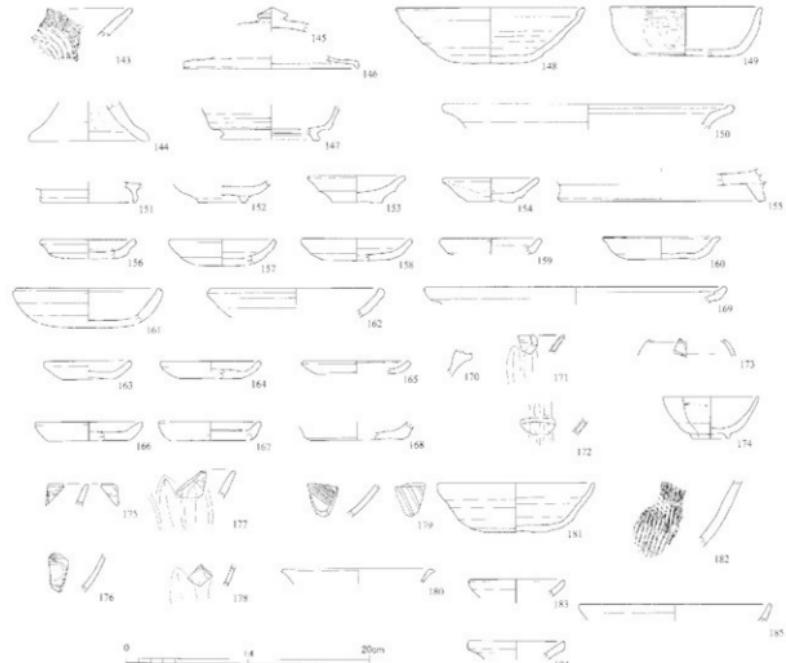


第24図 SE201・202, SD201出土遺物

茶碗で、152は12世紀後半の小碗、153・154は12世紀後半～13世紀初頭の小皿である。155は鉢の底部で、内面に使用痕が見られる。156～162は手づくねかわらけ、163～168はロクロかわらけである。これらのかわらけの年代は、共伴する遺物が明確でないため不明であるが、遺構出土のものを考慮すると、手づくねかわらけは13世紀、ロクロかわらけは12世紀後半～13世紀と想定できる。169・170は土師質土器であり、169は13世紀頃の伊勢型鍋、170は羽釜である。171・172は13世紀中頃～14世紀初頭の龍泉窯系青磁鑄蓮弁文碗である。173は白磁で、合子蓋と考えられる。内外面に少し青味がかる白色の透明釉が施され、外面下部に蓮弁文、上部に圈線が見られる。174は近世磁器の小碗である。高台の接地面を除いて施釉され、高台接地面には砂が付着している。

第25図175～180は今回の調査の排土から検出した遺物である。175～178は龍泉窯系青磁碗、179は同安窯系青磁碗、180は白磁盤である。175は外表面、176は内面に劃花文が見られ、年代は12世紀後半と考えられる。177・178は外面に鑄蓮弁文が施されており、年代は13世紀前半と考えられる。179は内面に櫛描文、外面に粗い櫛目文が見られ、年代は12世紀後半と考えられる。180は口縁部が断面三角形となるもので、年代は12世紀と考えられる。

第25図181～185は試掘調査で出土した遺物である。181は8世紀頃の須恵器無台碗で、底部は全面へラケズリされる。182は須恵器壺の体部片である。183～185は山茶碗で、183・184が小皿、185が碗であり、いずれも13世紀代のものと考えられる。出土地点は、184が試掘坑⑥、182が試掘坑⑦、181・183・185が試掘坑⑧である。



第25図 北調査区包含層、試掘調査、排土出土遺物

第Ⅳ章　まとめ

(1)かわらけについて

今回の調査では、中世前期のかわらけがまとめて出土したことが特筆される。出土したかわらけには、ロクロかわらけと手づくねかわらけがあり、共伴する山茶碗から12世紀後半～13世紀後半の年代が考えられる。出土したかわらけは手づくねかわらけが主体であり、ロクロかわらけは未実測のものも含め23点しかなく、かわらけ内で占める割合は低い。しかし、12世紀代の遺構からはロクロかわらけのみが出土するため、手づくねかわらけが出現し主体となるのは13世紀に入ってからである。さらに、今回出土した手づくねかわらけは、成形や調整の特徴から京都のかわらけを模倣した京都系かわらけと考えられ(中井2003)、京都の文化を取り入れた階層の存在がうかがえる資料である。また、中世前期の蒲御厨は、蒲氏が北条氏から御厨内の在地支配を任される時期であることが、史料から想定されるため、北条氏を通じて京都のかわらけの情報が伝えられた可能性が指摘できる。

(2)遺跡の性格について

古代の上組遺跡は、遺構が少なく、試掘調査の成果からも調査区内は集落の中心域からやや外れた縁辺部と考えられる。一方で特筆されるのは、祭祀遺物が比較的多く含まれることである。出土した祭祀遺物には陶馬や土製模造品があり、SD11出土の土師器小型壺も、赤彩される個体が含まれることや調整を丁寧に行わないことから、土製模造品の一種と捉えられる。これらの遺物を用いてどのような祭祀が行われたかについては、いずれの遺物も使用時の状態を留めて出土していないため不明である。しかし、陶馬については、水辺での出土が多く祈雨祭で使用された可能性が指摘されている(鈴木2009)。そのため、今回の調査区は、集落の縁辺部であることを考慮すると、水辺に隣接していたことが想定され、集落の縁辺部において祭祀が執り行われたことがうかがえる。

中世の上組遺跡については、調査範囲が限られているため明確ではないが、比較的規模の大きなSD01やSD14などの溝が検出されていることや、中世前期の貿易陶磁器が浜松市内の他の遺跡に比べて多く、京都系かわらけも多数出土していることから、有力階層の屋敷地であった可能性が想定される。しかし、SD01・14と京都系かわらけには時期差が存在し、屋敷地とかわらけは直接関係しない可能性が高い。しかしながら、中世のかわらけが饗宴の場で使用されていたことを考慮すると(藤原1988)、13世紀を前後する時期に屋敷地の区画が大きく変化した可能性が考えられる。また、上組遺跡周辺には蒲御厨の公文層の屋敷地が隣接しているが、これらの公文層が史料上に現れるのは14世紀になってからであり、上組遺跡が営まれた時期に屋敷地が機能していたかは不明である。そのため、上組遺跡に屋敷地を構えていた人物については不明であるが、出土した遺物の時期や内容から、史料上には現れてこない、蒲御厨内の有力者の存在が想定される。

参考文献

- 宇野隆夫1982「井戸考」「史林」第65巻 第5号
大山喬平1966「15世紀における遠州蒲御厨地域の在地構造」
『オイコノミカ』第3巻1・2合併号
鈴木敏則2004「静岡県下の須恵器編年」「有玉古窯」
鈴木敏則2005「出土須恵器について」「東若林遺跡」
鈴木敏則2009「祭祀遺物」「舞阪町天白遺跡」
太宰府市教育委員会2000「大宰府条坊跡 XV」
中井淳史2003「平泉・垂山・鎌倉」「中世諸城」
浜松市文化協会1998「祝子北遺跡 遺物編(本文)」
藤沢良祐1994「山茶碗研究の現状と課題」「研究紀要」第3号
三重県埋蔵文化財センター
藤原良忠1988「中世の食器・考」「列島の文化史」5
森田香司1991「蒲御厨編年史料(一)」「浜松市博物館館報」Ⅲ
森田香司1992「蒲御厨編年史料(二)」「浜松市博物館館報」Ⅳ

表1 出土遺物観察表(1)

閑版番号	取上番号	地区	遺構	種類	器種	口径	底形	高さ	色調	保存率	反転	備考	
												横	縦
1	315	南	SD01	山茶樹	瓶	16.4	7.7	5.3	灰白	100	反転横け跡3箇所、輪花4方向、砂目痕		
2	14, 18	南	SD01	山茶樹	瓶	16.0			灰白	15	反		
3	332	南	SD01	山茶樹	瓶	16.0			灰白	10以上	反		
4	326	南	SD01	山茶樹	瓶			7.2	灰白	20	反	粉瓶	
5	324	南	SD01	山茶樹	瓶			7.9	灰白	30	反	砂目痕	
6	317	南	SD01	山茶樹	瓶			8.0	灰白	30	反	素切、砂目痕	
7	94	南	SD01	山茶樹	小瓶			5.0	灰白	10以上?	反		
8	323	南	SD01	山茶樹	小瓶	8.0	4.2	2.7	灰白	100	反	素切	
9	327	南	SD01	山茶樹	小瓶	8.0	4.2	2.5	灰白	10	反	素切	
10	319	南	SD01	山茶樹	小瓶	8.8	4.6	3.0	灰白	100	反	素切	
11	328	南	SD01	土師器	壺	14.8	9.0	2.8	淡黄	20	反	ロクロ	
12	320	南	SD01	土師質	壺	9.8			暗	30	反	ロクロ	
13	18, 205	南	SD01	瓦器	壺				灰白	10	反	外面タタキ	
14	44	南	SD01	土師器	壺				灰白	10以上?	反		
15	25	南	SD01	土製品	壺				灰白	20	反	粉瓶	
16	256	南	SD01	山茶樹	瓶	7.4			灰白	10	反		
17	263	南	SD01	山茶樹	瓶	6.8			灰白	10	反	粉瓶	
18	261	南	SD01	山茶樹	瓶	9.9			灰白	10	反	粉瓶	
19	254	南	SD01	山茶樹	瓶	7.6			灰白	10	反	砂目痕	
20	339	南	SD01	山茶樹	瓶	8.0			灰白	10	反	素切、粉瓶	
21	338	南	SD01	山茶樹	瓶	6.7			灰白	30	反		
22	299	南	SD01	土師器	壺	9.0	5.3	1.6	灰	20	反	手づくね	
23	300	南	SD02	土師器	壺	16.0	7.7	5.3	灰	20	反	手づくね	
24	280	南	SD02	土師器	壺	9.2			淡黄	10	反	手づくね	
25	280	南	SD02	瓦器	壺身	9.8			灰	10	反	縫隙: 11.6cm	
26	252	南	SD02	瓦器	壺身	17.0			灰白	10	反		
27	263	南	SD02	瓦器	高台杯	10.5			灰	20	反	底部ケズリ	
28	258	南	SD02	瓦器	壺	8.3			灰白	10	反		
29	345	南	SD03	山茶樹	瓶	16.1	7.7	5.6	灰白	80	反	素切	
30	346	南	SD03	山茶樹	瓶	16.2	7.1	5.9	灰白	60	反	素切、砂目痕	
31	342	南	SD03	山茶樹	瓶	16.2			灰白	10	反		
32	343	南	SD03	山茶樹	瓶	16.5	7.1	5.3	灰白	100	反	粉瓶	
33	347	南	SD03	山茶樹	小瓶	8.8	4.1	2.2	灰白	95	反	素切	
34	344	南	SD04	山茶樹	小瓶	4.3			灰白	30	反	素切	
35	262	南	SD05	山茶樹	小瓶	6.4			灰白	10	反	素切、粉瓶	
36	264	南	SD05	山茶樹	壺	20.4			灰白	10以上?	反		
37	349	南	SD05	山茶樹	壺	26.6			灰白	10	反		
38	353	南	SD11	土師器	壺	13.2	6.2	11.0	淡黄	30	反		
39	352	南	SD11	土師器	壺	15.4	6.3	11.4	淡黄	70	反		
40	351	南	SD11	土師器	壺	14.9	6.1	13.3	壺	90	内外面に状赤彩		
41	363	南	SD14	山茶樹	瓶	16.0	8.0	5.9	灰白	30	反	輪花、粉瓶	
42	270	南	SD14	山茶樹	瓶	16.4			灰白	10	反	灰軸横け跡、輪花	
43	375	南	SD14	山茶樹	瓶	16.9	8.1	5.8	灰白	50	砂目痕		
44	270, 359	南	SD14	山茶樹	瓶	17.8	8.2	5.5	灰白	40	反	灰軸横け跡、輪花、素切、粉瓶	
45	358	南	SD14	山茶樹	瓶	18.2	7.8	5.9	灰白	40	反	灰軸横け跡、素切	
46	366	南	SD14	山茶樹	瓶	18.8	8.7	5.5	灰白	30	反	輪花	
47	285	南	SD14	山茶樹	壺	7.5			灰白	20	反	素切、砂目痕	
48	285	南	SD14	山茶樹	壺	7.5			灰白	40	反		
49	370	南	SD14	山茶樹	壺	7.5			灰白	40	素切		
50	393	南	SD14	山茶樹	壺	7.9			灰白	60	素切		
51	285	南	SD14	山茶樹	壺	8.5			灰白	40	素切、砂目痕		
52	361	南	SD14	山茶樹	壺	9.0			灰白	40	素切、粉瓶		
53	364	南	SD14	山茶樹	壺	9.2			灰白	20	反	素切	
54	285	南	SD14	山茶樹	壺	9.6			灰白	20	反		
55	243, 285	南	SD14	山茶樹	壺	9.7			灰白	40	反	素切	
56	368	南	SD14	山茶樹	壺	9.8			灰白	40	素切、砂目痕		
57	367	南	SD14	山茶樹	瓶	9.8			灰白	20	反	素切、粉瓶	
58	373	南	SD14	山茶樹	小瓶	9.0	4.1	2.8	灰白	10	反	素切	
59	352	南	SD14	山茶樹	小瓶	9.6	4.3	3.3	灰白	10	反	素切	
60	371	南	SD14	山茶樹	小瓶	9.8	3.9	3.3	淡黄	60	砂目痕		
61	360	南	SD14	山茶樹	小瓶	9.4	4.9	2.6	灰白	50	反		
62	270	南	SD14	土師器	壺	8.0	5.6	1.1	灰白	10以上?	反	ロクロ	
63	270	南	SD14	土師器	壺	8.0			灰白	10以上?	反	ロクロ	
64	394	南	SD14	土師質	鏡	18.0			壺	10以上?	反	内面: 灰白色、伊勢型鏡、内面にぶい縫	
65	285	南	SD14	土師器	鏡				灰白	10以上?	反		
66	270	南	SD14	土師質	鏡	24.0			灰白	10以上?	反	輪花、灰白色(やや青色)透明	
67	285	南	SD14	白磁	鏡	10.2			灰白	10	反	輪花、灰白色(やや青色)透明	
68	285	南	SD14	青磁	鏡				灰白	10以上?	反		
69	285	南	SD14	青磁	鏡				灰白	10以上?	反		
70	270	南	SD14	青磁	鏡				灰白	10以上?	反	輪花、灰白色(やや青色)透明	
71	317	南	SD14	青磁	鏡				灰白	10以上?	反	輪花、灰白色(やや青色)透明	
72	283	南	SD14	青磁	鏡				灰白	10以上?	反	外面タタキ	
73	270	南	SD14	青磁	鏡				灰白	10以上?	反	外面タタキ、内面当て具	
74	270	南	SD14	青磁	鏡				灰白	10以上?	反		
75	270	南	SD14	青磁	壺	22.0			淡黄	10以上?	反	把手	
76	270	南	SD14	青磁	壺				淡黄	10以上?	反		
77	285	南	SD14	石製品	砾石							幅5.7cm、厚さ1.6cm、重さ890g	
78	372	南	SD14	石製品	砾石							幅8.5cm、厚さ1.4cm、重さ110g	
79	288	南	SD15	山茶樹	瓶	7.4			灰白	30	反	粉瓶	
80	289	南	SD15	山茶樹	瓶	16.5			灰白	10以上?	反		
81	289	南	SD15	山茶樹	瓶	9.6			灰白	10	反		
82	390	南	SD14	白磁	馬蹄				灰白	90	内面: 19.0cm、脚部3本枝脚、上面に自然縫		
83	319	南	SD14	白磁	馬蹄				灰白	100	反	輪花、4瓣	
84	405	南	SD14	白磁	馬蹄				灰白	10以上?	反	輪花出	
85	405	南	SD14	白磁	馬蹄				灰白	10以上?	反	輪花出	
86	4	南	SK01	山茶樹	小瓶	8.6			灰白	10	反		
87	247	南	SK01	山茶樹	小瓶	8.6			灰白	10	反		
88	249	南	SK01	土師器	壺	8.6	7.0	1.5	淡黄	60	反	手づくね	
89	251	南	SK01	土師器	壺	9.6			青灰	10	反		
90	388	南	SK03	乳頭器	壺身	13.6	8.8	4.5	灰白	80	反	底部ケズリ。墨書き「石」か?	

表2 出土遺物観察表(2)

閑版番号	取上番号	地区	遺構	種類	器種	口径	底形	高さ	色調	保存率	反転	備考	
91 292		南	SK05	山茶樹	瓶	15.0	底白	10	反	輪花			
92 292		南	SK06	山茶樹	瓶	15.7	底白	20	反	輪花			
93 294		南	SK06	石製品	岩石	3.0					長さ 12.4cm、幅 5.6cm、重さ 250g		
94 311		南	SK07	乳頭器	坪壠	10.0	4.1	灰	40	反	天井部ケズリ		
95 296		南	SK07	土師器	便	17.0	底白	10	反				
96 296		南	SK07	土師器	便	18.0	底白	10	反				
97 314		南	SP02	土師器	便	18.6	込込・埋	10	反	二重口縁巻			
98 3, 242		南	SD01-2	土師器	瓶	15.2	底白	30	反	灰釉横濱掛			
99 240		南	SD02	土師器	瓶	9.0	灰	20	反	輪瓶			
100 240, 242		南	SD02	土師器	小瓶	9.4	底白	20	反				
101 272		南	SE02	東洋器	坪壠	16.4	底白	10	反				
102 241		南	SE02	東洋器	坪壠	11.0	灰	20	反				
103 241		南	SE02	東洋器	坪壠	12.0	底白	10	反				
104 272		南	SE02	東洋器	甕	21.2	灰	10	反				
105 241		南	SE02	土師器	高台环	12.0	赤褐色	10	反	赤褐色			
106 273		南	SE02	土師器	鉢	16.6	埋	10	反				
107 241		南	SE02	土師器	鉢	22.0	込込・埋	10	反				
108 272		南	SE02	土師器	便	17.8	圓環	10	反				
109 242		南	SE02	土師器	瓶		埋	10以降	反	把手			
110 242		南	SE02	土師器	瓶		込込・直腹	10以降	反	把手			
111 273		南	SE02	土師器	瓶		淡黃	10以降	反	把手			
112 273		南	SE02	土師器	瓶		淡黃	10以降	反	把手			
113 273		南	SE02	土師器	瓶		淡黃	10以降	反	把手			
114 242		南	SE02	土師器	陶馬		灰	10以降	反				
115 273		南	SE02	牛糞土器	甕		込込・黃	10以降	反				
116 278		南	SE03	山茶樹	瓶	17.0	底白	10	反	灰釉横濱掛			
117 278		南	SE03	山茶樹	瓶	16.0	底白	10	反	灰釉横濱掛			
118 278		南	SE03	山茶樹	瓶	17.6	底白	10以降	反				
119 278		南	SE03	山茶樹	瓶	15.6	底白	10以降	反				
120 313		南	SE03	山茶樹	小瓶	9.3	3.3	3.4	底白	100	墨書。刻版		
121 278		南	SE03	土師器	便	15.0	灰	10以降	反				
122 278		南	SE03	土師器	便	25.0	埋	10以降	反				
123 91		南	包含層	山茶樹	瓶	26.0	底白	20	反	輪花			
124 13		南	包含層	山茶樹	瓶	15.0	7.0	4.5	底白	50	反		
125 2		南	包含層	山茶樹	瓶	15.0	7.0	5.3	底白	20	反	輪瓶	
126 2		南	包含層	山茶樹	瓶	14.2	底白	20	反				
127 243		南	包含層	山茶樹	瓶	15.4	底白	10	反				
128 2		南	包含層	山茶樹	瓶	15.8	底白	10	反				
129 13		南	包含層	山茶樹	瓶	8.1	底白	20	反	輪瓶			
130 8		南	包含層	山茶樹	瓶	7.8	底白	40	反				
131 13		南	包含層	山茶樹	瓶	7.6	底白	40	反				
132 3		南	包含層	山茶樹	瓶	7.8	底白	20	反	輪瓶			
133 9		南	包含層	山茶樹	瓶	8.0	底白	20	反	輪瓶			
134 3		南	包含層	山茶樹	瓶	8.4	底白	30	反				
135 9		南	包含層	山茶樹	瓶	7.7	底白	80	反	輪瓶			
136 8		南	包含層	山茶樹	瓶	7.4	底白	40	反	墨書			
137 9		南	包含層	山茶樹	瓶	8.2	1.6	1.8	底白	20	反	輪花	
138 9		南	包含層	山茶樹	瓶	8.4	1.6	1.9	底白	20	反		
139 9		南	包含層	山茶樹	瓶	9.6	5.0	2.0	底白	10	反		
140 13		南	包含層	山茶樹	瓶	8.3	4.0	1.8	底白	80	反		
141 13		南	包含層	山茶樹	瓶	8.5	5.0	底白	40	反			
142 4		南	包含層	山茶樹	瓶	5.0	底白	10	反				
143 406		南	包含層	山茶樹	鉢	20.0	灰	10以降	反				
144 406		南	包含層	土師質土器	かわらけ	9.2	6.2	1.5	圓環	10	反	手づくね	
145 407		南	包含層	土師質土器	かわらけ	10.6			浅黃褐	10	反	ロクロ	
146 406		南	包含層	土師質土器	かわらけ	4.6	5.0	2.0	埋	20	反	手づくね	
147 238		南	包含層	土師質土器	かわらけ	10.0			底白	10以降	反	手づくね	
148 9		南	包含層	土師質土器	かわらけ	10.0			浅黃褐	10以降	反	手づくね	
149 20		南	包含層	土師質土器	かわらけ	10.0	1.9	1.0	底白	10以降	反	手づくね	
150 9		南	包含層	土師質土器	かわらけ	11.4	1.7	0.9	底白	10以降	反	手づくね	
151 92		南	包含層	土師質土器	かわらけ	8.0			底白	10	反	手づくね	
152 92		南	包含層	土師質土器	かわらけ	9.0			底白	15	反	手づくね	
153 92		南	包含層	土師質土器	かわらけ	5.0			浅黃褐	10	反	ロクロ	
154 8		南	包含層	土師質土器	かわらけ	4.4			埋	40	反	ロクロ	
155 92		南	包含層	土師質土器	瓶	18.0	底白		10以降	反	伊勢型瓶		
156 389		南	包含層	土師質土器	瓶	25.0	底白		10以降	反	伊勢型瓶		
157 13		南	包含層	白磁	瓶	17.0	底白	10	反	輪: 白磁失色			
158 4		南	包含層	白磁	瓶	14.2	自	10	反	輪: 白色(「中青色」透明)			
159 389		南	包含層	白磁	瓶	13.6	底白	10	反	輪: 白色(「中青色」透明), 10層出土			
160 389		南	包含層	白磁	瓶	13.6	底白	10	反	輪: 白色(「中青色」透明), 10層出土			
161 246		南	包含層	青磁	合子瓶	6.2			白	10以降	反	輪: 青色(「中青色」透明)	
162 243		南	包含層	青磁	合子瓶	6.2			白	10以降	反	輪: 青色(「中青色」透明)	
163 389		南	包含層	青磁	合子瓶	9.0	不明	4.6	白	10以降	反	輪: 青色(「中青色」透明), 10層出土	
164 11		南	包含層	青磁	坪壠	11.0			底白	10以降	反		
165 9		南	包含層	青磁	坪壠	10.2			底白	10	反		
166 47		南	包含層	青磁	坪壠	10.2			底白	10	反		
167 3		南	包含層	青磁	坪壠	17.2			底白	10	反		
168 26		南	包含層	青磁	坪壠	13.4			底白	10	反		
169 406		南	包含層	青磁	坪壠	14.8	9.7	2.7	灰	50	反	輪部ケズリ	
170 406		南	包含層	青磁	坪壠	12.2			底白	30	反	輪部ケズリ	
171 4		南	包含層	青磁	坪壠	15.0	7.5	4.0	底白	40	反	輪部ケズリ	
172 26		南	包含層	青磁	坪壠	13.6	9.0	2.2	底白	10	反	輪部ケズリ	
173 2		南	包含層	青磁	坪壠	11.2			底白	10	反	底部ケズリ	
174 4		南	包含層	青磁	坪壠	9.5			底白	30	反	底部ケズリ	
175 3		南	包含層	青磁	坪壠	12.7			底白	10	反	底部ケズリ	
176 97, 243		南	包含層	青磁	ごこ肺	9.5			灰	10	反		
177 9		南	包含層	青磁	甕	32.1			底白	10以降	反		
178 3		南	包含層	青磁	甕	22.8			底白	10以降	反		
179 9		南	包含層	青磁	甕	24.0			底白	10	反		
17 180 2		南	包含層	乳頭器	甕	18.6			底白	10	反		

表3 出土遺物観察表(3)

閑番	取上番号	地区	遺構	種類	器種	口径	底径	高さ	色調	保存率	反転	備考
181	243	南	包含層	直筒器	壺			7.0	灰	50	反	
182	10,396	南	包含層	直筒器	壺				灰白	10	反	頭部に波状と横縞文
183	11	南	包含層	直筒器	長瓶壺			8.0	灰白	80		
184	9	南	包含層	直筒器	高环			10.0	浅黄褐	50	反	
185	397	南	包含層	直筒器	高环				壺	30		
186	9	南	包含層	直筒器	环身	13.0		3.2	壺	50	反	外面部赤筋
187	406	南	包含層	直筒器	环身	14.0	10.0	7.15	灰	10	反	外面部赤筋
188	9	南	包含層	直筒器	环身	13.4			灰白	10	反	外面部赤筋
189	9	南	包含層	直筒器	环身	13.8			にぬき壺	10	反	外面部赤筋
190	26	南	包含層	直筒器	环身	12.8			にぬき壺	10以	反	外面部赤筋
191	8	南	包含層	直筒器	高台折			10.8	にぬき壺	10以	反	
192	4	南	包含層	直筒器	高台折				壺	10	反	外面部赤筋、内面埋文
193	9,23	南	包含層	直筒器	瓶形	19.0			浅黄褐	20	反	内面に舌状記文
17	194	308	南	包含層	直筒器	壺	13.0		壺	10以	反	肩部型壺
195	2	南	包含層	直筒器	壺	20.0			灰白	10以	反	内面部灰釉毛毫
196	9	南	包含層	灰釉陶器	碗				灰白	10以	反	
197	8	南	包含層	直筒器	瓶				浅黄褐	15		
198	92	南	包含層	直筒器	瓶				浅黄褐	10以		
199	90	南	包含層	直筒器	瓶				壺	15		
200	307	南	包含層	直筒器	瓶				壺	10以		
201	8	南	包含層	直筒器	瓶				浅黄褐	10以		
202	29	北	包含層	直筒器	瓶				浅黄褐	10		
203	14	北	包含層	直筒器	瓶				壺	10		
204	92	南	包含層	石製品	砾石							幅2.3cm、厚さ1.5cm、重さ21g
205	8,238	南	包含層	石製品	壺				浅黄褐	10以		
206	91	南	包含層	石製品	輪打口					10以		径4.6cm
207	91	南	包含層	石製品	輪打口					10以		
208	91	南	包含層	铁滓								
1	57	北	山系綱	小瓶	8.0	5.2	1.7	灰白	90			
2	52	北	SK200	山系綱	小瓶	8.2	4.9	1.7	灰白	100		
3	29	北	SK200	山系綱	小瓶	8.2	4.7	1.9	灰白	90		
4	29	北	SK200	山系綱	小瓶	8.0			灰白	10	反	
5	60	北	SK200	土師質土器	カワハラ17	9.4	3.8	1.6	浅黄褐	30	反	手づくね
6	55,59	北	SK200	土師質土器	カワハラ17	8.5	3.5	1.7	にぬき壺	50	反	手づくね
7	61	北	SK200	土師質土器	カワハラ17	8.5	3.5	1.7	壺	10	反	手づくね
8	59	北	SK200	土師質土器	カワハラ17	8.2			壺	10	反	手づくね
9	59	北	SK200	土師質土器	カワハラ17	8.6	5.6	1.9	壺	10	反	手づくね
10	62	北	SK200	土師質土器	カワハラ17	7.6			にぬき壺	20	反	手づくね、粘土帯巻き上げ
11	29	北	SK200	土師質土器	カワハラ17	8.0			浅黄褐	10	反	手づくね
12	29	北	SK200	土師質土器	カワハラ17	7.8			浅黄褐	10	反	手づくね
13	54	北	SK200	土師質土器	カワハラ17	13.8			壺	10	反	手づくね
14	56	北	SK200	土師質土器	カワハラ17	14.4			にぬき壺	10	反	手づくね
15	58	北	SK200	土師質土器	カワハラ17	12.4			壺	10	反	手づくね
16	51	北	SK200	土師質土器	カワハラ17	9.8			壺	40	反	手づくね、粘土帯巻き上げ
17	67	北	SK200	山系綱	瓶	17.2			灰白	10	反	
18	99	北	SK200	山系綱	瓶	16.4			灰白	10	反	
19	30	北	SK200	山系綱	瓶	16.0			灰白	10	反	
20	29	北	SK200	山系綱	瓶	16.0			灰白	10	反	
21	39	北	SK200	山系綱	小瓶	10.2			灰白	10	反	
22	78	北	SK200	山系綱	小瓶	8.8	4.8	2.1	灰白	80	反	
23	30	北	SK200	山系綱	小瓶	8.2			灰白	10	反	
24	99	北	SK200	山系綱	小瓶	9.2	4.6	1.7	灰白	20	反	
25	76	北	SK200	白磁	瓶	16.8			灰白	10	反	輪：乳白色透明
26	30	北	SK200	土師質土器	カワハラ17	10.2			浅黄褐	10	反	手づくね
27	30	北	SK200	土師質土器	カワハラ17	10.6			灰黄	10	反	手づくね
28	30	北	SK200	土師質土器	カワハラ17	10.0			浅黄褐	10	反	手づくね
29	31	北	SK200	土師質土器	カワハラ17	10.6			浅黄褐	10	反	手づくね
30	80	北	SK200	土師質土器	カワハラ17	10.2			壺	10	反	手づくね
31	39	北	SK200	土師質土器	カワハラ17	10.0			にぬき壺	10	反	手づくね
32	99	北	SK200	土師質土器	カワハラ17	8.0	7.2	1.4	壺	20	反	手づくね
33	71	北	SK200	土師質土器	カワハラ17	8.6	7.6	1.3	浅黄褐	10	反	手づくね、粘土帯巻き上げ
34	99	北	SK200	土師質土器	カワハラ17	8.0			にぬき壺	10	反	手づくね
35	30	北	SK200	土師質土器	カワハラ17	7.0			浅黄褐	10	反	手づくね、粘土帯巻き上げ
36	80	北	SK200	土師質土器	カワハラ17	14.8			壺	10	反	手づくね
37	72	北	SK200	土師質土器	カワハラ17	14.8			浅黄褐	10	反	手づくね、粘土帯巻き上げ
38	74	北	SK200	土師質土器	カワハラ17	15.0			浅黄褐	10	反	手づくね
39	31,99	北	SK200	土師質土器	カワハラ17	9.2			壺	10	反	ロクロ
40	99	北	SK200	土師質土器	カワハラ17	8.2			浅黄褐	20	反	ロクロ
41	80	北	SK200	土師質土器	カワハラ17	4.8			明灰陶	10	反	ロクロ
42	39	北	SK200	山系綱	壺				灰白	10	反	
43	100	北	SK200	山系綱	壺	5.0			灰白	20	反	
44	100	北	SK200	山系綱	壺	6.0			灰白	20	反	
45	101	北	SK200	山系綱	壺	6.2			灰黄	10	反	
46	101	北	SK200	土師質土器	カワハラ17	6.2			浅黄褐	10	反	ロクロ
47	100	北	SK200	土師質土器	カワハラ17	7.6			にぬき壺	10	反	ロクロ
48	233	北	SK200	土師器	环身	10.6			黄灰	10	反	内面：灰白色
49	32	北	SK200	山系綱	瓶	13.8			灰白	10	反	
50	32	北	SK200	山系綱	瓶	15.2			灰白	10	反	
51	32	北	SK200	土師質土器	カワハラ17	8.2	5.2	1.4	にぬき壺	10	反	手づくね
52	32	北	SK200	土師質土器	カワハラ17	9.4			にぬき壺	10	反	手づくね
53	33	北	SK200	山系綱	小瓶	7.8			灰白	10	反	
54	34	北	SK200	山系綱	瓶	16.0			灰白	10	反	
55	34	北	SK200	山系綱	小瓶	8.2			灰白	10	反	
56	34	北	SK200	土師質土器	カワハラ17	10.3			灰白	10	反	
57	35	北	SK200	山系綱	小瓶	8.2			灰黄	10	反	
58	35	北	SK200	土師質土器	カワハラ17	8.6			壺	10	反	手づくね
59	81	北	SK200	土師質土器	カワハラ17	11.4			浅黄褐	10	反	手づくね
60	81	北	SK200	白磁	瓶	16.8			灰白	10	反	輪：白色（やや灰色）透明
61	36	北	SK200	山系綱	瓶	17.0			灰白	10	反	
62	82	北	SK200	山系綱	瓶	8.0			灰白	20	反	

表4 出土遺物観察表(4)

閑版	番号	取上番号	地区	遺構	類種	器種	口径	底径	高さ	色調	保存状態	反転	備考
63	107		北	SP205	山糸綱	小瓶	9.8	4.8	2.0	灰白	10	反	柱瓶内出土
64	106		北	SP205	土師器土器	かわらけ	9.8	6.8	1.3	埋	10	反	手づくね
65	36		北	SP205	土師器土器	かわらけ	9.8	6.8	1.3	浅黄褐	10	反	手づくね
66	36		北	SP205	土師器土器	かわらけ	8.4			浅黄褐	10	反	手づくね
67	36		北	SP205	土師器土器	かわらけ	7.6			にぬ・埋	10	反	手づくね
68	107		北	SP205	土師器土器	かわらけ	9.2			埋	10	反	手づくね、柱瓶内出土
69	106		北	SP205	土師器土器	かわらけ	10.8	8.8	1.5	浅黄褐	10	反	ロクロ
70	36		北	SP205	土師器土器	かわらけ	10.8	8.8	1.5	浅黄褐	10	反	柱瓶内出土
71	108		北	SP207	山糸綱	瓶	17.0			灰白	10	反	柱瓶内出土
72	8		北	SP207	山糸綱	小瓶	7.0			灰白	10	反	
73	38		北	SP207	山糸綱	小瓶	9.2			灰	10	反	
74	38		北	SP207	土瓶	かわらけ	7.6			浅黄褐	10	反	手づくね
75	83		北	SP207	土瓶	かわらけ	8.4			浅黄褐	10	反	手づくね
76	108		北	SP207	土瓶	かわらけ	9.0			浅黄褐	10	反	ロクロ、柱瓶内出土
77	84		北	SP207	天目	瓶	2.8			じぶん・埋	30	反	輪: 黒色
78	87		北	SP207	山糸綱	瓶	9.0			灰白	20	反	
79	39		北	SP209	山糸綱	小瓶	8.6			灰白	10	反	
80	26, 86		北	SP209	青白綱	合子蓋	7.6			削端灰	10	反	輪: 青白色透明
81	88		北	SP209	山糸綱	小瓶	8.4	4.2	2.1	灰白	30	反	
82	40		北	SP209	山糸綱	小瓶	8.0			灰白	10	反	
83	40		北	SP209	山糸綱	小瓶	5.4			灰白	10	反	
84	108		北	SP209	土瓶	かわらけ	9.4	8.0	2.0	浅黄褐	10	反	手づくね
85	110		北	SP209	土瓶	かわらけ	8.6			埋	10	反	手づくね
86	49		北	SP209	土瓶	かわらけ	8.8	8.8	1.5	浅黄褐	20	反	手づくね
87	49		北	SP209	土瓶	かわらけ	9.6			埋	10	反	手づくね
88	40		北	SP209	土瓶	かわらけ	8.4			浅黄褐	10	反	手づくね
89	40		北	SP209	土瓶	かわらけ	9.4			浅黄褐	10	反	手づくね
90	40		北	SP209	土瓶	かわらけ	8.8			埋	10	反	手づくね
91	40		北	SP209	土瓶	かわらけ	9.0	5.8	2.3	浅黄褐	10	反	手づくね
92	40		北	SP209	土瓶	かわらけ	12.6			浅黄褐	10	反	手づくね
93	40		北	SP209	土瓶	かわらけ	15.0			浅黄褐	10	反	手づくね
94	40		北	SP209	土瓶	かわらけ	9.0			にぬ・埋	20	反	手づくね
95	42		北	SP211	土瓶	かわらけ	15.2			埋	10	反	手づくね
96	176		北	SP211	山糸綱	瓶	26.0	8.0	5.8	灰白	80	反	柱瓶横丁掛け、輪花、砂日彌、先切
97	119, 121		北	SP211	山糸綱	瓶	16.0	6.0	3.7	灰白	80	反	柱瓶横丁掛け、輪花、先切
98	133		北	SP211	山糸綱	瓶	14.8	7.0	5.7	灰白	60	反	柱瓶横丁掛け、輪花、先切
99	130, 148, 154		北	SP211	山糸綱	瓶	16.0	7.0	6.0	灰白	30	反	柱瓶横丁掛け、先切
100	166, 191, 192		北	SP211	山糸綱	瓶	16.4	7.0	6.1	灰白	70	反	柱瓶横丁掛け、輪花、砂日彌、先切
101	124		北	SP211	山糸綱	瓶	16.2	8.8	6.0	灰白	30	反	柱瓶横丁掛け、輪花、短脚
102	119, 122, 136, 138, 140, 143, 152, 156	瓶	北	SP211	山糸綱	瓶	16.4	8.0	6.1	灰	90	反	柱瓶横丁掛け2箇所、輪花、砂日彌、先切
103	119, 121, 126, 127, 130, 157		北	SP211	山糸綱	瓶	17.4	8.0	6.6	灰白	40	反	柱瓶横丁掛け、輪花、先切
104	137		北	SP211	山糸綱	瓶	16.0	7.7	6.1	灰白	40	反	柱瓶横丁掛け、砂日彌
105	125, 138, 159, 164		北	SP211	山糸綱	瓶	16.7	8.6	5.7	灰白	30	反	柱瓶横丁掛け、砂日彌
106	119, 120, 191		北	SP211	山糸綱	瓶	18.4	9.0	7.1	灰白	20	反	輪花、先切
107	167		北	SP211	山糸綱	瓶	15.5	7.2	6.4	灰白	40	反	砂日彌、先切
108	159, 195		北	SP211	山糸綱	瓶	16.9	7.4	5.4	灰	30	反	砂日彌、先切
109	161		北	SP211	山糸綱	瓶	17.4	7.6	5.8	灰	50	反	内面化粧付
110	171		北	SP211	山糸綱	瓶	17.4	7.6	5.8	灰白	40	反	砂日彌、先切
111	142		北	SP211	山糸綱	瓶	8.6	6.7	2.7	灰白	60	反	砂日彌、先切
112	188		北	SP211	山糸綱	瓶	9.4	4.3	3.0	灰白	50	反	砂日彌、先切
113	181		北	SP211	山糸綱	瓶	8.0	4.2	2.2	灰	90	反	砂日彌、先切
114	119, 126, 127, 195		北	SP211	山糸綱	瓶	8.6	4.4	2.5	灰白	60	反	砂日彌、先切
115	169		北	SP211	山糸綱	瓶	8.7	4.2	2.6	灰白	100	反	砂日彌、先切
116	123, 130		北	SP211	山糸綱	瓶	9.3	5.5	3.5	灰白	70	反	砂日彌、先切
117	174		北	SP211	山糸綱	瓶	9.6	5.4	2.8	灰白	40	反	
118	171		北	SP211	山糸綱	瓶	9.6	4.7	3.0	灰白	90	反	瓶板、先切
119	189		北	SP211	山糸綱	瓶	8.8	6.7	2.7	灰白	60	反	砂日彌
120	144, 192		北	SP211	山糸綱	瓶	10.4	5.5	2.4	灰白	30	反	瓶板
121	179		北	SP211	山糸綱	瓶	10.4	5.5	2.4	灰白	70	反	砂日彌
122	190		北	SP211	山糸綱	瓶	6.6			灰白	10	反	瓶板、先切
123	130, 191, 192		北	SP211	山糸綱	瓶	8.8	4.7	2.4	灰白	70	反	砂日彌、先切
124	153, 191		北	SP211	山糸綱	瓶	7.8	3.4	2.0	灰白	70	反	砂日彌、先切
125	119		北	SP211	山糸綱	片口鉢				灰白	10	反	
126	195		北	SP211	土瓶	土器	7.2			にぬ・埋	40	反	ロクロ
127	146		北	SP211	土瓶	土器	34.0			にぬ・埋	10	反	
128	119		北	SP212	氣瓶器	壺蓋	8.4			灰	10	反	
129	191		北	SP212	氣瓶器	壺蓋	15.2			灰白	10	反	
130	119		北	SP212	氣瓶器	身	2.0			灰	20	反	
131	195		北	SP212	氣瓶器	身	14.4			灰白	10	反	
132	119		北	SP212	土瓶	土器	11.6			にぬ・埋	10	反	内外面赤絵
133	191		北	SP212	土瓶	身	19.2			にぬ・埋	10	反	
134	119		北	SP212	土瓶	身	22.6			壺	10	反	
135	119		北	SP211	石臼山	石臼		2.7					
136	191		北	SP211	土製品	土器				長さ7.1cm、幅4.2cm、重さ97.5g			
137	196		北	SP202	山糸綱	瓶	16.8			明青灰	10	反	
138	244		北	SP202	山糸綱	瓶	8.3						内外面被熱
139	197		北	SP202	東樂器	壺	5.1			明青灰	40	反	
140	196		北	SP202	染付	小瓶	6.6			白	30	反	輪: 白色(モヤ灰色)失透
141	196		北	SP202	瓦質土器	壺	9.0			灰褐色	15	反	
142	199		北	SP202	瓦質土器	身	15.8			明青灰	10	反	
143	16		北	包含層	寄生土器	壺				瓦オーバー	10	反	
144	16		北	包含層	瓦質土器	身	10.0			浅黄褐	20	反	
145	118		北	包含層	瓦質土器	身				瓦	20	反	縫み徑2.0cm
146	16		北	包含層	瓦質土器	身	14.2			灰白	10	反	
147	16		北	包含層	瓦質土器	身	8.0			灰白	10	反	
148	16		北	包含層	瓦質土器	身	15.6	6.0	4.6	灰	20	反	
149	16		北	包含層	瓦質土器	身	12.4	8.8	4.0	にぬ・埋	20	反	内外面赤絵
150	116		北	包含層	瓦質土器	壺	24.0			壺	10	反	
151	237		北	包含層	瓦質土器	壺	9.0			灰白	10	反	内外面灰
152	17		北	包含層	山糸綱	小瓶	4.0			灰黃	20	反	

表5 出土遺物観察表(5)

図版番号	取上番号	地区	遺構	器種	口径	底径	高さ	色調	残存率	反転	備考
153 16		北	包含層	山茶碗	小皿	8.0	4.0	2.1	灰白	60	反
154 16		北	包含層	山茶碗	小皿	7.9	3.9	2.0	灰白	90	
155 16		北	包含層	山茶碗	鉢		17.2		灰	10	
156 16		北	包含層	土師質土器	かわらけ	7.8			焼	10	反 手づくね
157 16		北	包含層	土師質土器	かわらけ	7.8			焼	10	反 手づくね
158 16		北	包含層	土師質土器	かわらけ	7.8			焼	10	反 手づくね
159 16		北	包含層	土師質土器	かわらけ	8.4			焼	10	反 手づくね
160 16		北	包含層	土師質土器	かわらけ	9.6	6.0	1.8	焼	20	反 手づくね
161 17, 237		北	包含層	土師質土器	かわらけ	12.4			焼	20	反 手づくね
162 16		北	包含層	土師質土器	かわらけ	14.6			焼	10	反 手づくね
163 16		北	包含層	土師質土器	かわらけ	7.2	4.0	1.8	焼	20	反 ロクロ
164 16		北	包含層	土師質土器	かわらけ	8.2	4.8	1.4	焼	10	反 ロクロ
165 116		北	包含層	土師質土器	かわらけ	9.0	5.6	1.8	焼	10	反 ロクロ
166 16, 26		北	包含層	土師質土器	かわらけ	9.8	6.6	1.8	焼	20	反 ロクロ
167 16		北	包含層	土師質土器	かわらけ	8.4			焼	20	反 ロクロ
168 28		北	包含層	土師質土器	かわらけ	8.0			焼	10	反 ロクロ
169 116		北	包含層	土師質土器	鉢		25.0		灰褐色	10	反 伊勢型瓶
170 28		北	包含層	土師質土器	鉢		25.0		灰褐色	10	
171 116		北	包含層	土師質土器	鉢		25.0		灰褐色	10	
172 18		北	包含層	土師質土器	鉢		25.0		灰褐色	10	
173 16		北	包含層	土師質土器	合子皿		25.0		白	10	
174 17		北	包含層	土師質土器	合子皿		25.0		白	10	
175 26		不明	青磁	碗		7.8	3.0	3.5	白	10	輪：明緑色透明
176 26		不明	青磁	碗					白	10	輪：明緑色透明
177 26		不明	青磁	碗					灰	10	輪：明緑色透明
178 26		不明	青磁	碗					灰	10	輪：明緑色透明
179 26		不明	青磁	碗					灰	10	輪：明緑色透明
180 26		不明	白磁	盤					灰	10	輪：灰白色透明
181 試掘 10	試掘 ⑥	武藏器	环身	13.0	8.2	4.0			灰	40	反
182 試掘 8	試掘 ⑦	武藏器	便						灰	10	
183 試掘 10	試掘 ⑤	山茶碗	小皿	8.0					灰	10	
184 試掘 5	試掘 ⑤	山茶碗	小皿	8.0					灰	10	反
185 試掘 10	試掘 ⑥	山茶碗	鉢	16.0					灰	10	反

表6 調査区分別中世遺物組成表

	土師質土器		山茶碗				中世陶器	貿易陶磁器			
	かわらけ	鍋	碗	小碗	鉢	合計		青磁	白磁	その他	合計
調査区全体	706(792)	15	703(823)	257(280)	5	965(1108)	13	15	12	3(4)	30(31)
南調査区	78(127)	10	427(482)	84(88)	0	501(570)	5	5	8	1	14
北調査区	618(655)	7	225(290)	159(180)	4	388(474)	7	2	3	2(3)	7(8)

※1 数値は接合後破片数である。() 内は接合前破片数であり、接合後破片数と同数の場合は接合前破片数を省略した。

※2 山茶碗の小皿は小皿も含めた数値である。

※3 調査区全体の数値には排土出土遺物も含む。

表7 遺構別中世遺物組成表(主な遺構のみ)

	土師質土器		山茶碗				中世陶器	貿易陶磁器			
	かわらけ	鍋	碗	小碗	鉢	合計		青磁	白磁	その他	合計
SD01	3(34)	0	29(50)	15	0	44(65)	0	0	0	0	0
SD02	13(18)	1	19(22)	2	0	21(24)	0	0	0	0	0
SD04	1	0	9(10)	4	0	13(14)	0	0	0	0	0
SD14	4	6	36(55)	18(19)	0	54(74)	0	1	1	0	2
SK05	1	0	7	3	0	10	0	0	0	0	0
SE03	0	1	18	3	0	21	0	0	0	0	0
包含層(南)	54(67)	2	294(307)	32(33)	0	326(335)	4	4	7	1	12
SK201	68(86)	0	1	4	0	5	0	0	0	0	0
SK202	147(152)	0	10	19	0	29	0	0	1	0	1
SK203	89	0	30	7	0	37	0	0	0	0	0
SE201	2(6)	2	71(135)	36(54)	2	109(191)	4	0	0	0	0
SP201	32	0	12	1	0	13	0	0	0	0	0
SP203	13	0	7	2	0	9	0	0	0	0	0
SP204	24	0	3	4	0	7	0	0	1	0	1
SP205	47	0	3	14	0	17	0	0	0	0	0
SP207	23	0	5	7	0	12	0	0	0	1	1
SP208	19	1	7	13	0	20	0	0	0	1(2)	1(2)
SP209	79	0	1	8	0	9	0	0	0	0	0
SP210	11	0	3	0	0	3	0	0	0	0	0
包含層(北)	43(52)	3	44(45)	27(30)	2	73(77)	1	2	1	0	3

※1 数値は接合後破片数である。() 内は接合前破片数であり、接合後破片数と同数の場合は接合前破片数を省略した。

※2 山茶碗の小皿は小皿も含めた数値である。

写 真 図 版

図版1



南調査区全景(西から)



SD01完掘状況(南東から)



SD14完掘状況(北東から)

図版3



SD04出土状況(北から)

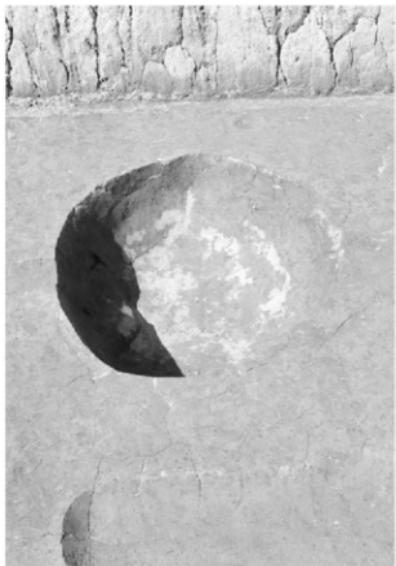
SD04完掘状況(北から)



SD11出土状況(南西から)



SK03出土状態(南から)



SE02出土状態(南から)



陶馬出土状態(西から)

図版5



北調査区全景(西から)



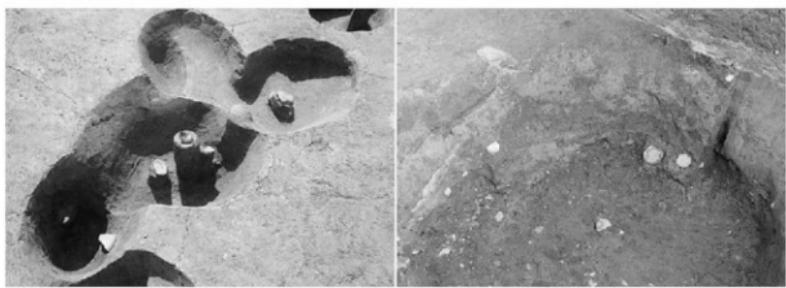
北調査区上層遺構出土状態(南東から)

図版6



SK201出土状態(南から)

SK202出土状態(南東から)



SP205～208出土状態(東から)

SE201下層出土状態(北西から)



SE201上層出土状態および土層(西から)

图版 7



SD01 出土遺物集合



SD01 · 02 出土遺物



SD04 出土遺物集合



29



30



32



33



40

SD04・11 出土遺物

图版 9



43

44

45

59

61

SD14 出土遗物

図版 10

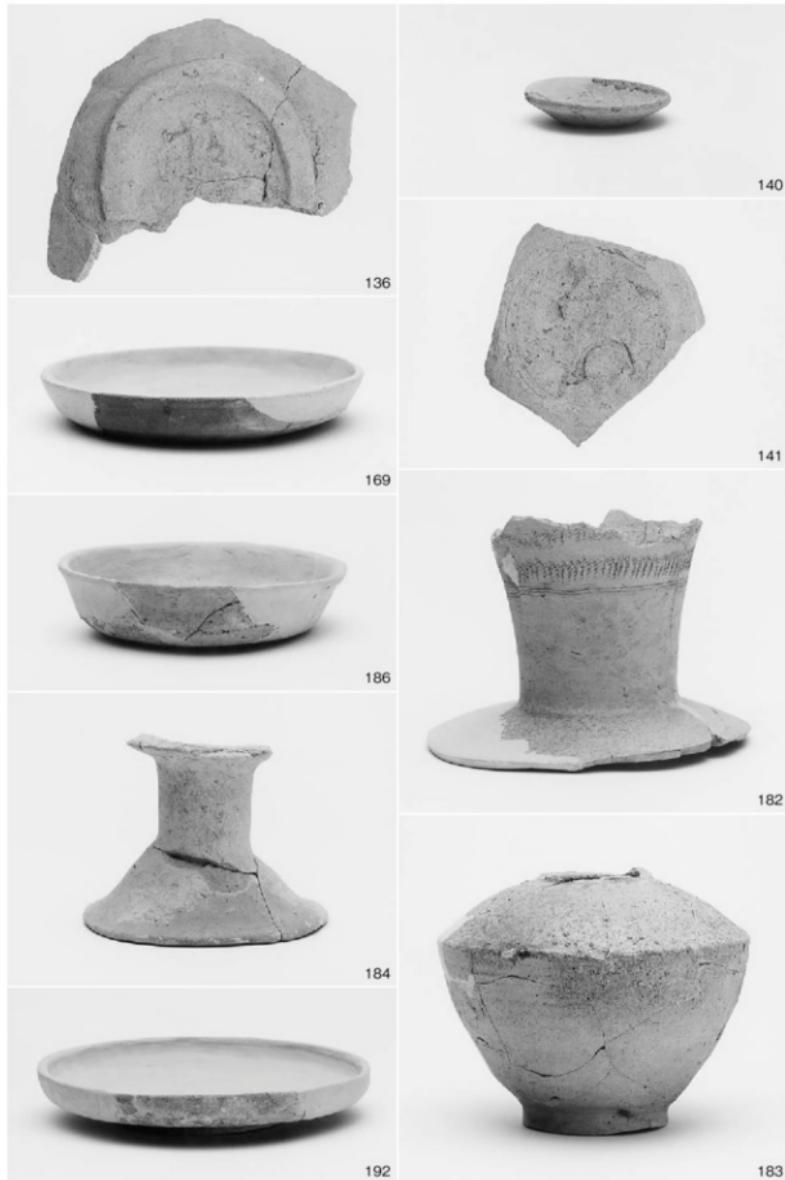


SD14, SK01・03, SE03, 包含層出土遺物



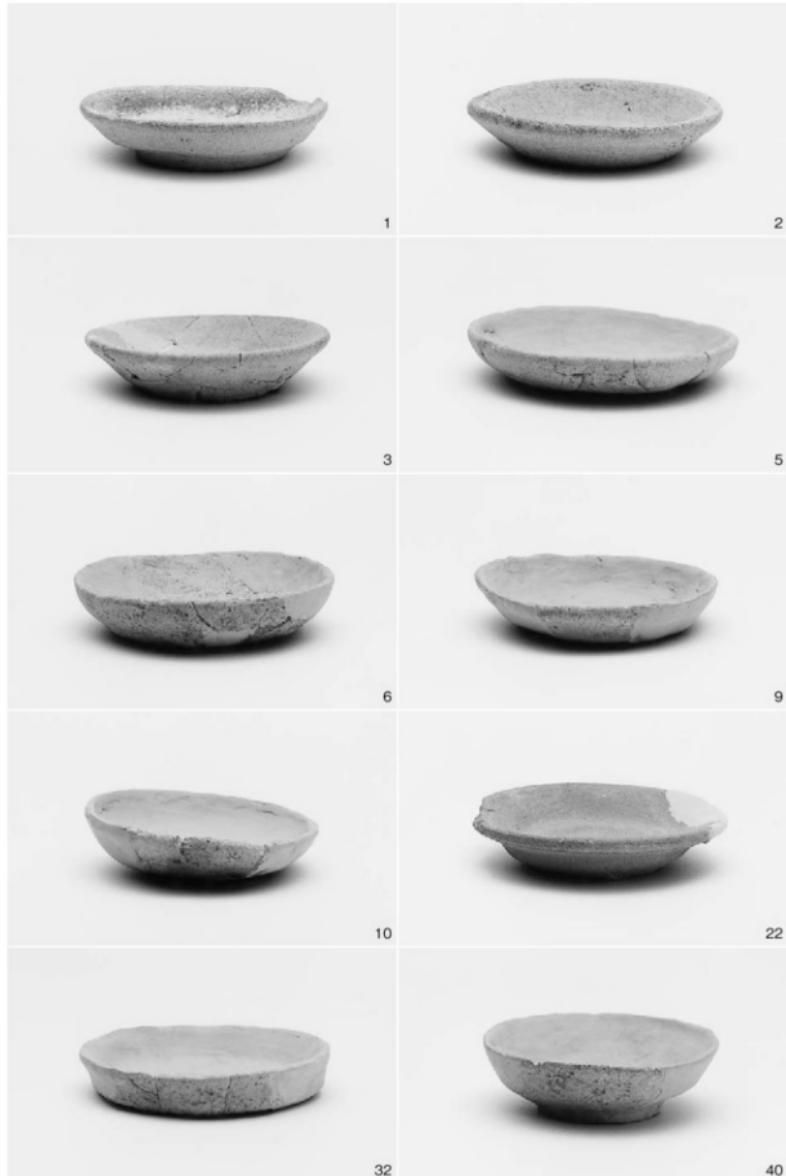
土製品集合

图版 11



南調査区包含層出土遺物

図版 12



SK201・202 出土遺物

图版 13



北調查区上層遺構群出土遺物



75



77



80



81



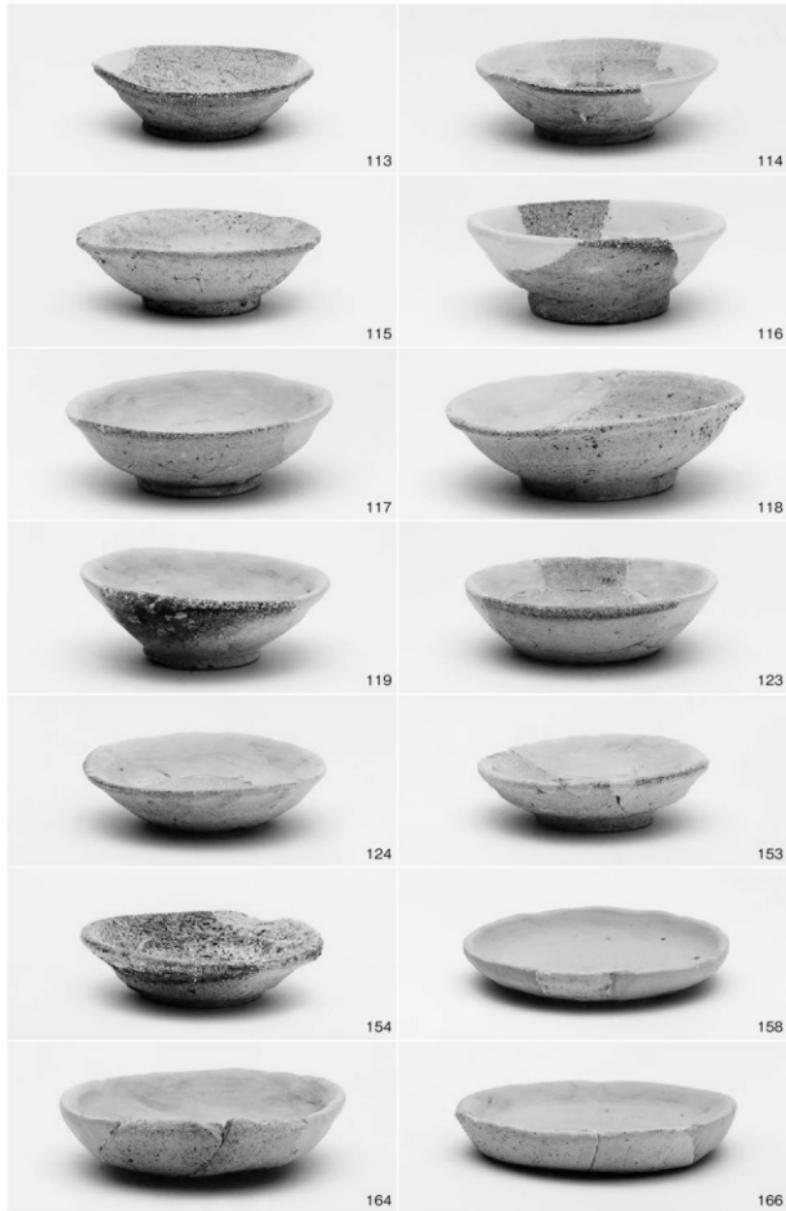
84

SP207·208·209 出土遺物



SE201 出土遺物

図版 15



SE201、北調査区包含層出土遺物

報 告 書 抄 錄

上組遺跡

平成 23 年 3 月 25 日

編集 浜松市教育委員会
(浜松市生活文化部文化財課が補助執行)
発行 財團法人 浜松市文化振興財團
印刷 中部印刷株式会社